

## 1 研究の構想

### (1) 研究テーマとテーマを設定した背景

#### ①研究テーマ

共に認め高め合う、心豊かで活力ある児童・生徒の育成  
～豊かな心の育成を土台とした学力・心の居場所づくり～

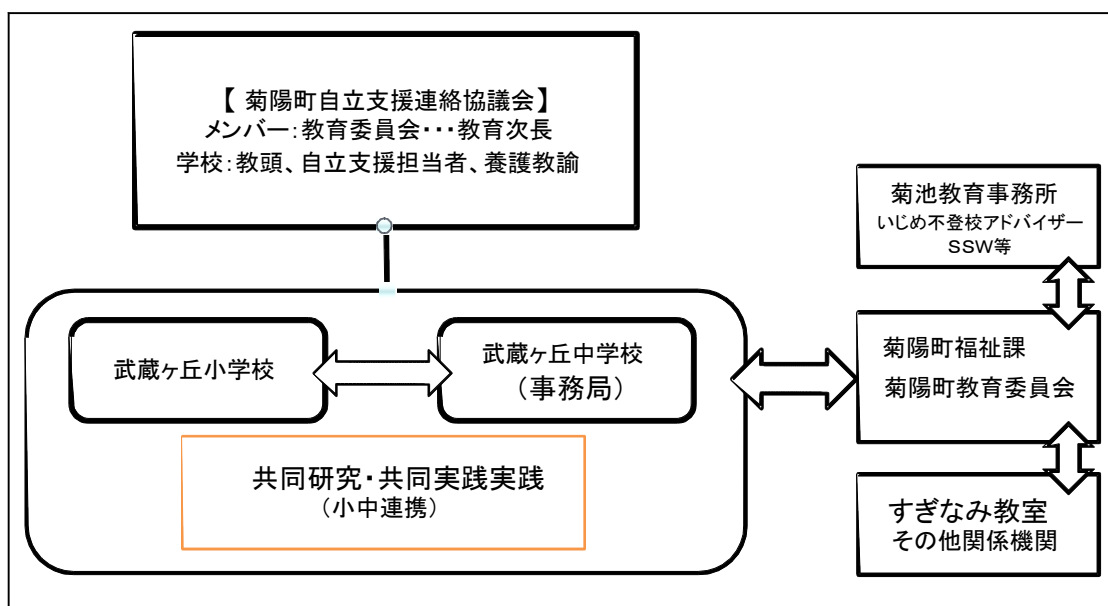
#### ②背景

県営団地、光の森地区の急激な都市化により転出入が多く、児童・生徒数も飛躍的に増加した経緯があり、家庭環境についても共働きの世帯が多く、核家族化がすすんでいる。

また、大人社会においても近隣の関わりが薄れ、それに伴い、子ども同士の関わりも薄れ、関わり方のスキルが身につけていない。家庭、地域の教育に対する期待、関心が高い反面、生活が不安定な家庭もあることから、不登校気味の児童・生徒への対応が教育課題の一つである。

本地域の児童・生徒は学校行事や部活動等に積極的に取り組む一方で、基本的な生活習慣や決まりを守る態度、お互いを認め高めあう関係が不十分である。複雑な家庭状況や家庭の教育力の低下を背景とした問題行動等の生徒指導上の課題も多岐にわたっている。

### (2) 調査研究の推進組織体制



### (3) 研究内容

#### ①人間関係づくりに関するカリキュラム開発と実践

ア 不登校の未然防止としての短学活の時間の活用

イ 構成的エンカウンター等を取り入れた学活、心に響く道徳の授業の推進

ウ 教員の様々なスキルアップトレーニング

エ スズキ校務ソフトの活用

②継続的な体験活動の実施と復帰に向けたプログラムの開発

ア 不登校対策委員会におけるレベル分けとアプローチ分けの実行

イ 学校行事としてのキャンプ「さわやか・いきいき宿泊体験」の企画（相談室で計画）

ウ 関係機関との連携をさらに深める

エ 連絡協議会の開催…武蔵ヶ丘小・中学校の担当者と連携

③ピース・メソッドによる立案実行見直し

(4) 検証の視点、方法

①QUアンケート等による検証と学校職員による評価

②不登校および不登校傾向児童生徒の欠席日数・行動の変化等による検証

③SSW活用後の不登校児童生徒の変容

④様々な場所におけるピース・メソッドの手法を取り入れた研究の見直し

## 2 武蔵ヶ丘中学校の取組

### I 研究主題

#### 共に認め高め合う心豊かな生徒の育成を目指した自立支援事業

～学校全体で取り組む意図的な活動と心の居場所づくりの工夫～

### II 研究主題設定の理由

#### 1 教育的背景から

昨今では、産業・経済や雇用の多様化等、将来の不透明さが増幅する背景のもと、社会人としての自立が迫られる後期中等教育終了までに、生涯にわたるキャリア形成の基本となる能力・態度を育成することが重要となっている。それと同時に、いじめや不登校、暴力行為等、生徒指導上の諸問題が依然として相当数に昇り、その対応や解決にはいっそう困難な事例が増加している。

特に、不登校等の未然防止、早期発見、早期対応に繋がる取組は、今日の問題であり、熊本県においても、菊陽町においても、急務の対策が必要であると考えた。

新学習指導要領では、「確かな学力」と「個性の伸長」を目指すと述べてあるが、二つは密接に関連しながらのびていくものである。国際学力調査「生徒の学習到達度調査：PISA2009」においては、「無答率と正答率の相関」では、正答率が低い問題では無答率が高い傾向が見られた。単に、読解力等の課題に起因するだけでなく、自信がないことに対して記述することに抵抗があると言える。自らの意志を上手に伝える学習や、様々な体験の機会を多く取り入れる学習を意図的に取り入れていくことで、「個性の伸長」を目指し、そのことによって「確かな学力」を身につける土壌をつくり、キャリア形成の基本となる能力・態度を育成できると考えた。

#### 2 本校の教育目標から

本校は、「心身健康で 共に認め高め合う 心豊かで 活力ある武蔵ヶ丘中生徒」という教育目標の下に教育実践を行っている。「①心身健康」と「②共に認め 心豊か」を目指すために、①は、不登校生等への新たな体験活動を、②は、不登校の未然防止の意図的なグループワーク等の活動を行うことで効果が見込まれると考える。そのためには、2つの柱①と②を意識した取組を行うことで、本校の課題を解決していくことへ繋がると考えた。

#### 3 生徒の実態から

昨年度、生徒の実態把握のために、「Hyper Q-U」、「菊陽町生

活実態に対する意識調査」のアンケートを行った。学年によって実施内容が異なっているため、今年度分も一緒に掲載している。昨年度の推移がわかる現3年生分で実態把握を行った。

### (1) 実施時期

	① Hyper Q-U				② 菊陽町生活実態に対する意識調査			
	H23 6月	H23 11月	H24 6月	H24 11月	H23 6月	H23 11月	H24 6月	H24 11月
現3年生	○	○	○	○	○	○	○	
現2年生		○	○	○	○	○	○	
現1年生			○	○			○	

### (2) 昨年度の調査結果から見える生徒の実態

ア **Hyper Q-U** (よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート) の結果

特に、「いごこのよいクラスにするためのアンケート」に注目した。(図 1-①～⑦)

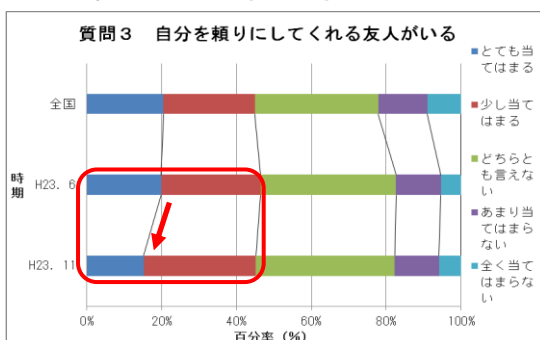


図 1-①

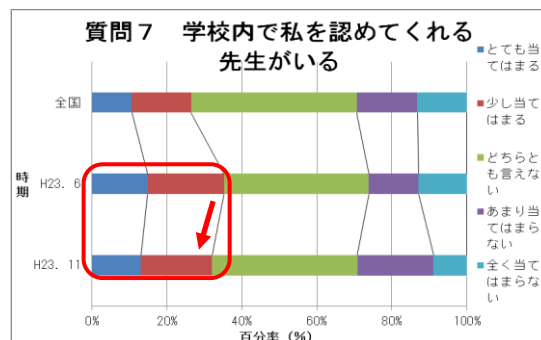


図 1-②

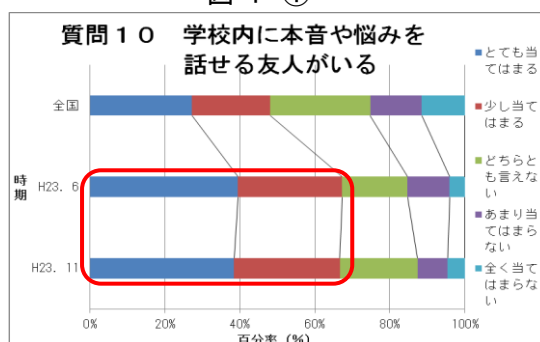


図 1-③

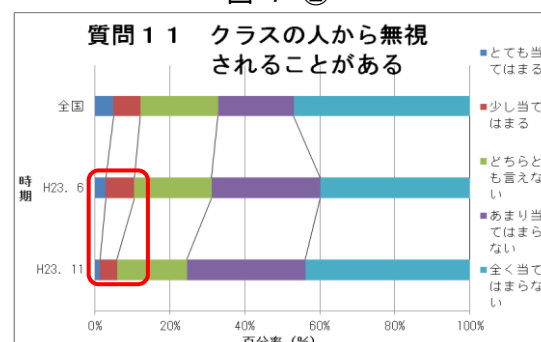


図 1-④

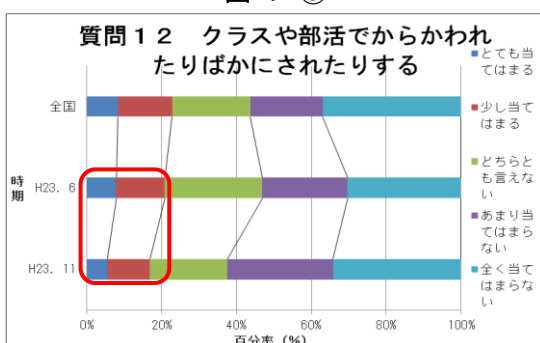


図 1-⑤

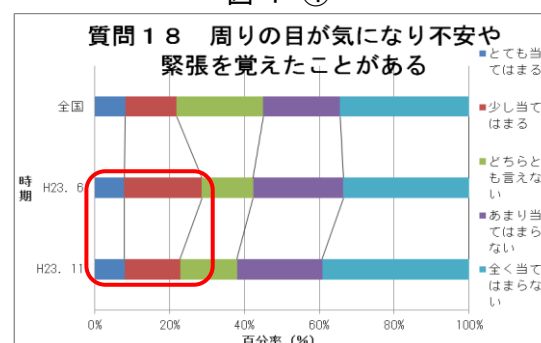


図 1-⑥

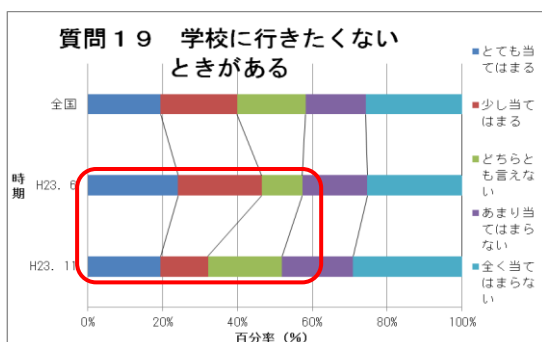


図 1-⑦

ピックアップした項目を次の（ア）～（ウ）の3項目に分類して分析した。

（ア）自己有用感に関する項目（図1-①、④）

**質問 3 自分を頼りにしてくれる友人がいる**  
**質問 11 クラスの人から無視される**

学級で無視されることがある生徒は少なくなってきたものの、「自分を頼りにしてくれる友人がいる」は若干減っており、本当に結びついている学級になっていないことがわかった。

（イ）安心できる居場所・自尊感情に関する項目（図1-②、③、⑤、⑥）

**質問 7 学校内で私を認めてくれる先生がいる**  
**質問 10 学校内に本音や悩みを話せる友人がいる**  
**質問 12 クラスや部活でからかわれたりばかにされたりする**  
**質問 18 周りの目が気になり不安や緊張を覚えたことがある**

「教師に認めてもらえなくなった」、「本音と言える友人がいない」と感じる生徒は若干増えていることがわかった。しかし、ばかにされることはなくなり、学級が緊張感を持たずに過ごせる場所だと感じる生徒は増えていることがわかった。

（ウ）不登校傾向、登校への意欲減退傾向に関する項目（図1-⑦）

**質問19 学校に行きたくないときがある**

1学期は「学校に行きたくない時がある」と答えている生徒が46.5%にのぼり、対人関係で困難を抱えたり、学校に魅力が持てなかつたりする生徒が大変多いということがわかった。11月の結果でも、「行きたくない時がある」生徒が32.1%、どちらとも言えないという生徒を含めると51.9%という高い数値を示し、深刻な状況であった。

## イ 菊陽町生活実態に関する意識調査の結果

授業力向上を目的として研究部で活用していた内容で、毎年全学年実施している。30項目の質問の中で生徒の「意識面」と「実態面」で抽出して分析している。現3年生の2年時のデータで、緑色で示してある。

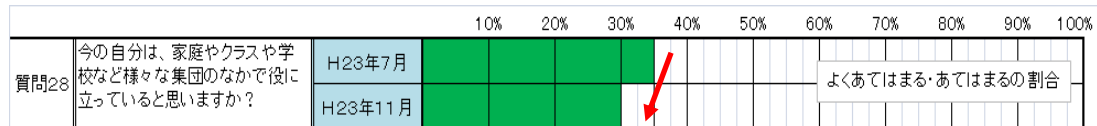


図 2-①

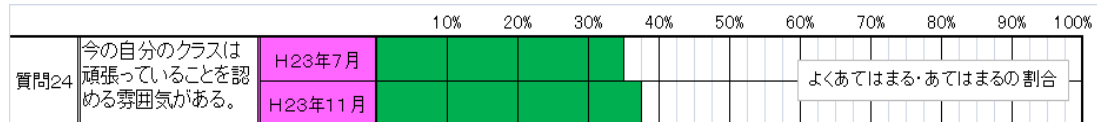


図 2-②

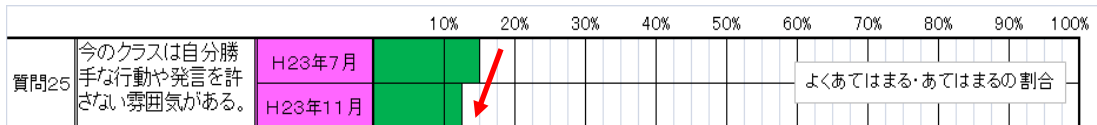


図 2-③

アと同様に、いくつかの項目に分けて分析した。

(ア) 自己有用感に関する項目 (図 2-①)

**質問 2 8 自分は家庭やクラス、学校等の様々な集団の中で役に立っていると思うか？**

6月 は 35%、11月には 30%にまで低下している。

(イ) 互いを認めることに関する項目 (図 2-②)

**質問 2 4 自分のクラスは頑張っていることを認める雰囲気がある。**

35%から 37%へ増加したものの、6割～7割もの生徒が互いを認めることができていない状態であるとわかった。

(エ) 正義が通ることに関する項目 (図 2-③)

**質問 2 5 クラスは自分勝手な行動や発言を許さない雰囲気がある。**

わずか 15%という大変厳しい結果から、さらに下回って、12%まで落ちている。

ア、イより、悩みを話せる友だちがいて、ばかにされることはないが、自己有用感を持てなかったり、学級で正義が通らなかったり、何らかの理由で学校に行きたくなかったりすることがわかった。生徒の日常の活用の様子や道徳・学活等のワークシートからも、クラスの友人と一定の距離を保ち、本音で触れ合うことが少なくことや、希薄な人間関係になっており、安心して過ごせる学級・学年になっていないことがわかった。

地域的にも、光の森地区の急激な都市化により転出入が多くなり、生徒数も飛躍的に増加している結果、大人社会においても近隣同士の関わりが薄れている。それに伴い、子ども同士の関わりも薄れ、関わり方のスキルが身についておらず、上手に人と関わるができない生徒が多いと言える。

本校の生徒は、学校行事や部活動等に積極的に取り組む一方で、基本的な生活習慣やルールを守る態度、お互いを認め高めあう関係が不十分である。複雑な家庭状況や家庭の教育力の低下を背景とした問題行動等の生徒指導上の課題も多岐にわたっている。

### (3) 不登校生徒の実態

平成23年度の不登校生徒の学校復帰を目的とした取組は5ページ(表1)の通りである。取組の結果、平成22年度末には、不登校生徒26名・学校復帰者6名であったが、平成23年度末には、不登校生徒36名・学校復帰者9名となり、不登校生徒数が急増した。本校において、不登校の解消は大きな教育課題であり、未然防止の観点で教育活動を進めることが重要であることがわかった。

表 1

<ul style="list-style-type: none"> <li>● 教育サポーターと不登校生徒のサイクリング</li> <li>● すぎなみ教室、心の教育相談員、教育サポーターとの連携             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 料理教室 (クレープ、ハンバーグ作り)</li> <li>・ お楽しみ会</li> <li>・ サマースクール (卒業生も参加)</li> </ul> </li> <li>● 毎週月曜日の放課後の教科学習会 (3学期から実施) ~頑張りマンデー~             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 各学年の教科担当がさわやか相談室・小会議室等を主な学習場所として実施</li> <li>・ 音楽、美術、保健体育等、生徒のニーズに合わせて学習を実施</li> <li>・ 生徒指導主事と心の教育相談員とが企画調整、今年度は不登校対策委員会で担当</li> </ul> </li> <li>● 関係機関との連携 (SSWによる指導・提案もあり)</li> </ul>
--

Ⅱの1～3の結果より見えてきた自立支援事業における課題には、大きく分けると2点上げられることがわかった。

#### 1 人間関係づくりに関する課題

▲ 教師の活動スキル、認める (共感的指導) スキルの不十分さ

▲ 生徒の、「他者との関わり方」を学ぶスキル学習の少なさ

▲ 生徒の、「自分の思いを上手に伝える」、「相手の話を上手に聴く」スキルの低さ

▲ 指導内容の共通理解・共通実践の不足



不登校予備軍をつくらない・未然防止を目的とした学級集団づくりの必要性

#### 2 学校復帰 (学級復帰) プログラムに関する課題

▲ 不登校や不登校傾向の理由の多様化を考えた、個に応じた対策の検討

▲ 一人一人の自立を促すきっかけとなる体験活動の充実



できる (できた) ことを増やす・関わる人を増やす体験活動の充実の必要性

Ⅱの1～3の理由により、本研究では、2本の柱である「不登校予備

軍をつくらない・未然防止を目的とした学級集団づくり」と「不登校傾向の生徒のできることを増やす・関わる人を増やす体験活動の充実」を自立支援事業の両輪と考えた。学校全体で具体的活動を意図的に取り組んでいくことで、生徒一人一人の不安定な気持ちを解消でき、不登校予備軍の未然防止に繋がると考えた。また、不登校生や不登校傾向の生徒が安心できる環境において体験活動を効果的に行うことで、生徒の「私はできる」という自信を持ち、学校・学級への復帰に向けた意欲的な生活を送ることに繋がると考えた。

このことが、個性の伸長を目指し、確かな学力を身につける土壌をつくり、キャリア形成の基本となる能力・態度を育成させると考えた。自立支援事業では、特に、不登校の未然防止の活動に重点を置いて取り組み、不登校生への活動等は不登校対策委員会で重点的に行うことにした。

### Ⅲ 研究の仮説

#### 1 研究主題にせまるために

##### (1) 研究の構想図

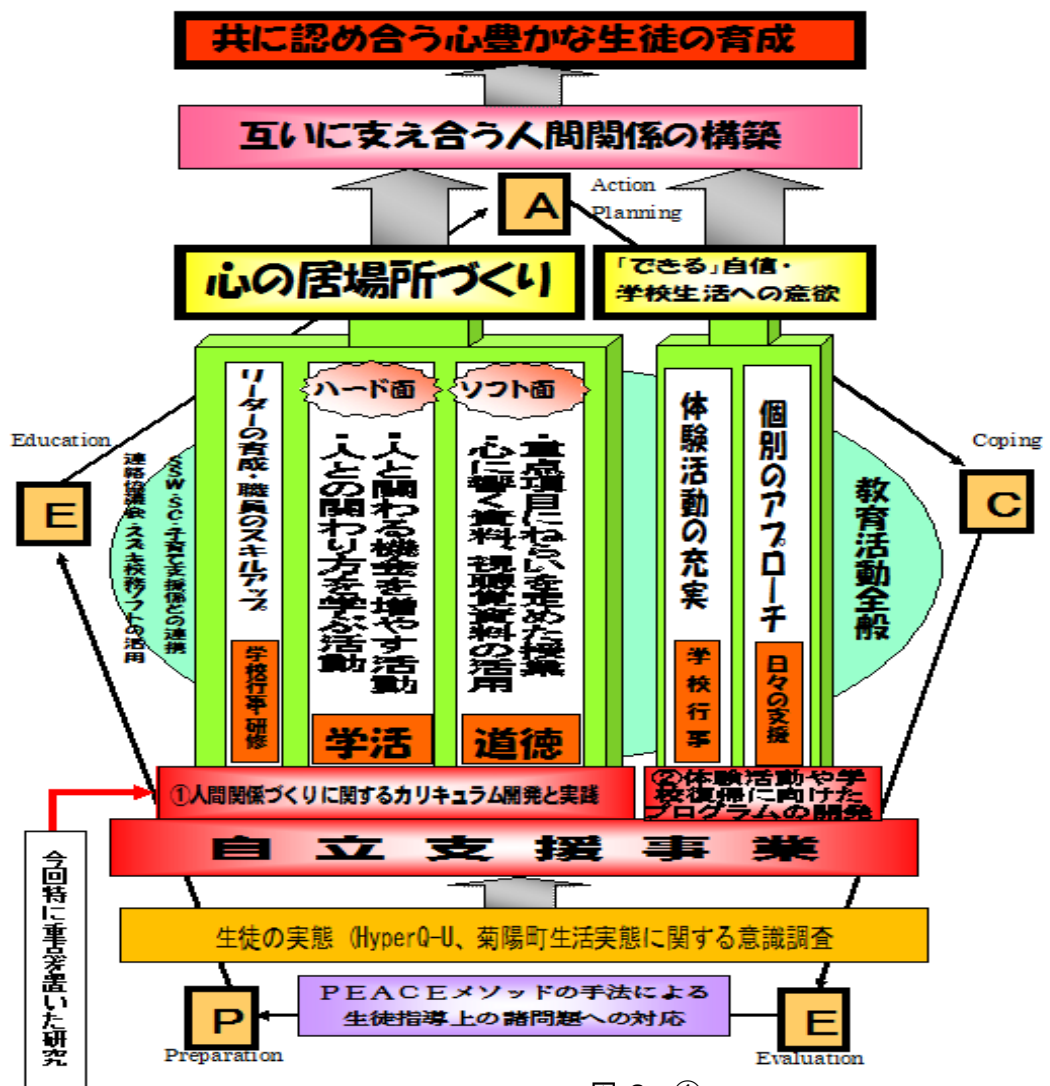


図 3 - ①

## (2) 校内推進体制

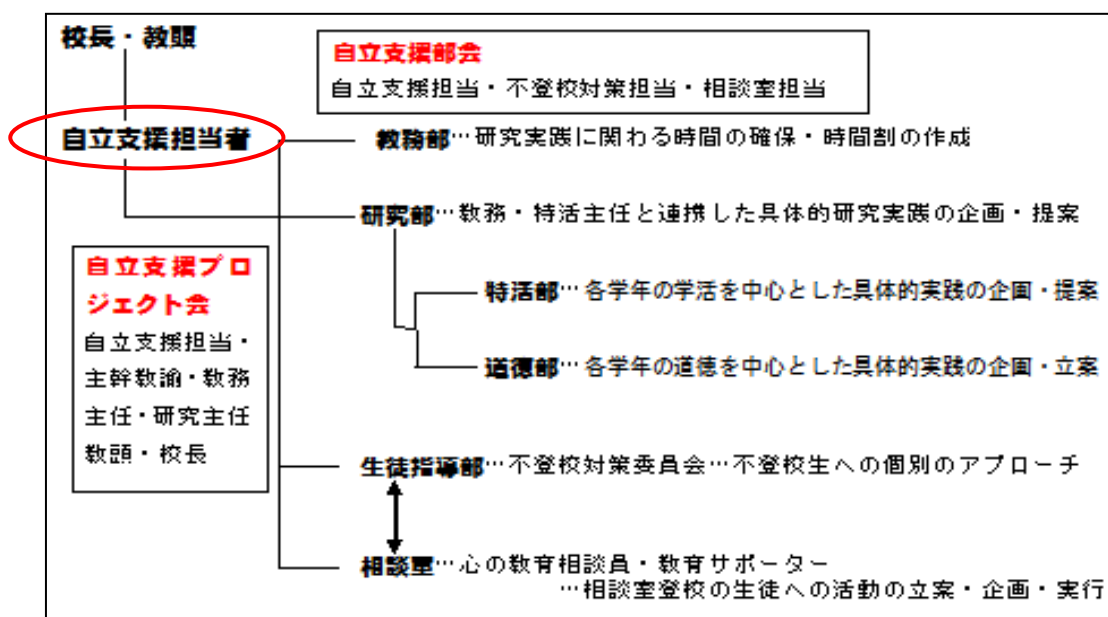


図 3-②

本校では、自立支援事業担当者が、教育活動全般のコーディネーターとして、各部会に参加することで、P.E.A.C.Eメソッドの手法を活用しやすくした。(Vの1(3)に詳しく参照)

## 2 研究の仮説

仮説1：生徒の実態を正確に分析し、学校全体で、人との関わりを増やす活動や関わり方を学ぶ活動等と、心に響く道徳教育を行うことで、ハード面(学級集団の状態)とソフト面(道徳的心情面)の両面における心の居場所づくりができ、学校生活の意欲が向上し、不登校の未然防止に繋がるであろう。

仮説2：体験活動や人と関わる活動を行うことで、「できる」自信が育まれ、学校復帰に向けて一歩ずつ前向きに進むことに繋がるであろう。

この二つを進めることで、共に認め合う心豊かな生徒を育て、互いに支え合う人間関係を構築することに繋がるだろうと考えた。

## IV 研究の進め方

### 1 仮説を検証するための視点

#### (1) 視点1(仮説1、2のために)

昨年度同様、今年度当初の生徒の実態を把握することで、生徒が抱えている困難さや不安さを正確に把握し、P.E.A.C.E(以下ピー

ス) メソッドの手法を踏まえ、全職員で共通理解・共通実践を図る。

## (2) 視点2 (仮説1のために)

(1) 視点1を基にした具体的な取り組みとして、ハード面、ソフト面の両面から取り組み、不登校の未然防止や心の居場所づくりを行う。ハード面として、グループワーク等(以下GW)を意図的に行い、友人との関わり方を学ぶ機会をつくり、友だちと積極的に関わる意欲を高める。ソフト面として、友情・感謝の心・集団生活の向上等を中心に、心に響く道徳教育を推進し、友だちと関わることの喜びや相手への感謝の念、より良い集団としての向上について考える機会を持ち、道徳的心情を高めていく。

## (3) 視点3 (仮説2のために)

不登校・不登校傾向の生徒、相談室登校の生徒への個別のアプローチを考えて、できた(できる)という体験活動を行い、意欲的に生活を過ごすきっかけをつくっていく。

## (4) 視点4

教育活動全般を通して、職員間で生徒の様子を話題にして、情報の共有を図る。

## 2 視点のための手段として

### (1) 視点1のための手段

ア 「HyperQ-U」と「菊陽町生活実態に対する意識調査」を用いて、生徒の実態を把握する。

イ ピースメソッドの手法で、各会議や職員会議等で共通理解のもと実践していく。

### (2) 視点2のための手段

ア 職員のスキルアップを目指したアサーショントレーニングや傾聴演習を行う。また、「HyperQ-U」の活用方法に関する研修を行い、各学級の実態にあった集団づくりの資料等を基に各学級の分析に活用する。

イ 人と関わる機会を増やすGW等を意図的に行う。その際に、グルーピングを大事に行う。

ウ 人との関わり方を学ぶアサーショントレーニングを行う。

エ 道徳の時間に、副読本のみならず、心に響く資料の活用を行う。その際、『2-(3)友情』や『2-(6)感謝の心』や『4-(4)集団生活の向上』等の内容項目を重点項目として実施する。

オ ソーシャルスキルトレーニング(以下SST)等を短学活で取り入れる。

カ 生徒の自己有用感を育てるために、リーダー育成に力を入れる。

### (3) 視点3の手段

- ア 不登校対策委員会で、レベル分けとアプローチ分けを行う。
- イ 不登校生徒・相談室登校生徒を含む不登校傾向の生徒を対象として、学校行事で活動体験・宿泊体験を行う。


### (4) 視点4

- ア S S WやS C、町の子育て支援係とさらに連携を深める。
- イ 自立支援事業連絡協議会に参加し、小学校の実態を把握する。
- ウ スズキ校務ソフトを活用し、生徒の状況をタイムリーに把握する。

## V 研究の実際と考察

### 1 2つのアンケート調査を基にした生徒の実態把握

#### (1) **Hyper Q-U**の結果より

今年度当初の実態に関しても、前記した3項目に分類して分析した。詳細は**VI 研究の成果と課題**にグラフも記載してある。(P24 図 35 )

#### ア 自己有用感に関する項目 (図 35-①、④)

無視されることは少なくなってきたが、「自分を頼りにしてくれる友人がいるか」という問いに、当てはまるという生徒は以前半数にとどまっていた。

#### イ 安心できる居場所・自尊感情に関する項目 (図 35-②、③、⑤、⑥)

今年度6月は、本項目は全て改善傾向にあった。3年生になり、自分のことを知ってくれている友だちや教師が多くなったことも要因として考えられる。

#### ウ 不登校傾向、登校への意欲減退傾向に関する項目 (図 35-⑦)

他の項目と比べて改善傾向にあるとは言い難い。依然として、「学校に行きたくないときがある」という生徒が33.4%、どちらとも言えないという生徒を含めると55.0%で、昨年よりもさらに高い数値を示し、毎年、年度当初は、特に登校への不安感が大きいことがわかった。

ア～ウの結果より、周囲の友だちとの関係が良い方へと向かっている生徒は多いが、学校生活の意欲にまで至っていないことがわかった。

## (2) 菊陽町生活実態に対する意識調査の結果

● 生徒意識グラフ：H24.6

現3年生

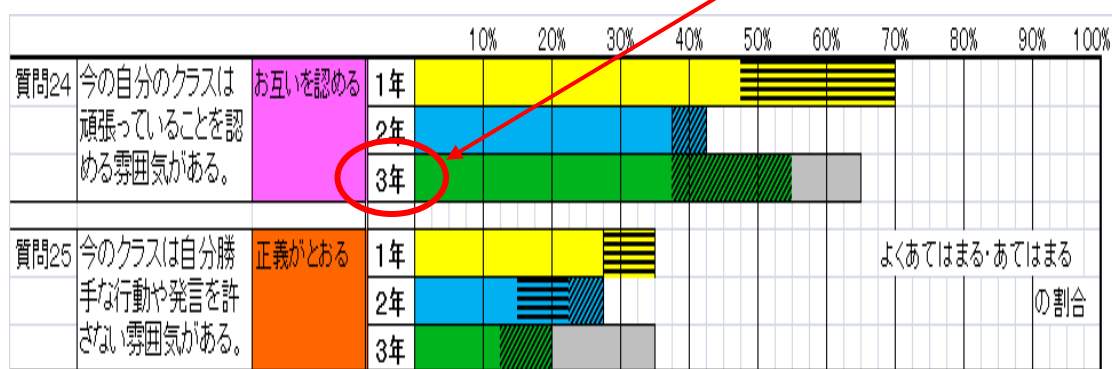
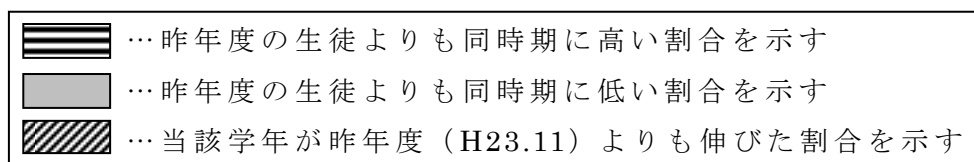


図 4



現3年生は、昨年度よりも伸びている項目が多いが、昨年度の3年生よりも「互いを認める」「正義が通る」という項目で大変低い数値であった。現2年生も同様の結果である。対して、現1年生が大変高い数値を示していた。(図4) 様々な問題を抱えている状況はどの学年でも同じである。現1年生は、小学校3校から集まり、互いを理解し合っている段階ではない6月末であっても「互いを認める」「正義が通る」に関して高い数値だったことから、1年部の6月までの取組も大いに参考にできる部分があるのではないかと考えた。

### (3) ピースメソッドの手法を取り入れた取組計画

本校は大規模校であるため、生徒指導上の諸問題の把握や対処の過程において、全職員で十分に共通理解・共通実践がなされていないこともある。そこで、ピースメソッドの手法を取り入れ、生徒の実態を客観的データに基づいて把握し、計画段階から職員全員で十分に共通理解をして実動し、再度客観的に分析することが有効だと考えた。

表2のように、PDCAサイクルよりも、計画の段階で共通理解を図ることができた。しかし、スムーズに計画を実行するために予めの計画を多角的に見つめて提案すべきだと改めて感じた。

表 2

過程	実施時期	主な取組内容
P	① 昨年度 7 月 1 1 月	① 菊陽町生活実態に関する意識調査（30 項目の質問）
	② 昨年度 6 月 1 2 月	② HyperQ-U テスト（2 年生のみ 2 回実施）
	③ 6 月 2 2 日	③ 菊陽町生活実態に関する意識調査（30 項目の質問）
	④ 6 月 2 5 日	④ HyperQ-U 実施（第 1 回目）
E	① 5 月 2 5 日	① 校内研究推進委員会…活動内容について意見交換
	② 5 月 3 1 日	② 生徒指導部会…不登校対策・自立支援を含む諸課題について
	③ 6 月 1 4 日	③ 生徒指導部会…自立支援事業についての 2 つの柱の周知と再検討
	④ 6 月 2 0 日	④ 職員会議…子どもの自立を目指した全体提案
A	① 5 月 2 9 日	① 自立支援部会…（自立支援担当・不登校対策担当・相談室担当） ・本事業の方向性について ・昨年度の自立支援事業概要の周知
	② 6 月 1 9 日	② 自立支援事業研究推進プロジェクト会 …（自立支援担当・主幹教諭・教務主任・研究主任・教頭・校長） ・「人間関係づくりに関するカリキュラム開発」の提案 ・時間割、教育課程との兼ね合いの検討
	③ 6 月 2 1 日	③ 生徒指導部会…・サマーキャンプについての提案内容の検討
	④ 6 月 2 2 日	④ 校内研究推進委員会…HyperQ-U について、夏休みの研修の内容の検討
C	① 夏休み（2 回）	① 職員研修…GW、アサーショントレーニング、傾聴演習の研修
	② 2 学期 3 回／学期	② 校内研修…研究授業（共通内容の提案） ・道徳「きみは本当にステキだね」研究授業 ・学活「アサーショントレーニング」研究授業
	③ 2 学期 数回／学期	③ 短学活における構成的エンカウンター等の実施 ・アサーショントレーニング ・構成的エンカウンター
PE	① 1 1 月末	① HyperQ-U（第 2 回目）…前回との比較・分析
E	① 1 2 月	① 校内研究推進委員会…研究内容、生徒の実態の推移から見た課題の割り出し ② 生徒指導部会…不登校対策、自立支援を含む諸課題について ④ 職員会議…推移から見た課題と 3 学期に向けた提案
A	①～④ 1 月	① 自立支援部会…2 つの柱の 3 学期の目標を設定する ② 自立支援事業研究推進プロジェクト会…時間割・教育課程との連携 ③ 生徒指導部会…不登校生の現状と対策について検討 ④ 校内研究推進委員会…次年度からの『ピアサポート学習』の検討
以下は予定		
C	① 1 月～3 月上旬	① ピアサポート学習の先行実施
E	① 3 月末	① 自立支援事業プロジェクト会、校内研究推進委員会 ・今年度の取組の反省 ・次年度へ向けての構想

## 2 人間関係づくりに関するカリキュラムの開発と実践

…未然防止を目的とした集団づくり

### (1) 諸活動を行うための職員のスキルアップ研修等

夏休みの2回の研修と職員会議を活用した。

#### ア 7月27日研修～GWの進め方～

- ① 自立支援事業とは、自立支援事業の流れ（A地域の柱）
- ② 道徳資料提案、GWの演習（人と関わる機会を増やす演習）  
道徳「花束言葉」、学活「なぞのマラソンランナー」の演習（図5）
- ③ 構成的エンカウンターやGW、グルーピングについて

不登校の未然防止のプログラムにおいて、もっとも重要なのは『職員の意識とスキル』である。教師自身が、活動の意図を把握し、意図的なグルーピングやGWを行わなければ、ただのゲームの時間になってしまう。そこで、9月に実際に授業で行う予定の「学活：なぞのマラソンランナー」（図5）のGWの参加型研修を行った。（図6、7）



図5



図6



図7

#### イ 8月10日研修～アサーショントレーニング～

- ① アサーショントレーニング（人との関わり方を学ぶ演習）
- ② 傾聴演習の仕方（教師に必要なカウンセリングマインド等）

「アサーショントレーニング」や「傾聴」について知らない職員も多かったので、「関わり方」の重要性について模擬授業を行った。（図8、9）また、熊本大学教育学部のHPにある対人関係対処スキル学習ソフト（図10）や傾聴演習（図11）の紹介も行った。

コミュニケーションの特徴			
コミュニケーションの種類	特徴	動作・姿勢・向き・身振り・手振り・表情・視線・声の調子	ことば
非主張的 (パッシブタイプ) おどおどさん	自分よりあいて優先	ためらい、もじもじ、はっきりしない声	あのー、えーとー、うーん、でも...
攻撃的 (アグレッシブ) いばりやさん	自分のことだけ考えて相手のことは考えない	速くて大きな声 上から見下す姿勢	～しろよ こうしようがいいぞ
自己主張的 (アサーティブ) さわやかさん	自分のことも、相手のことも同時に考える	落ち着いた声 目線を合わせる	私は〇〇だと思います、理由を述べる、提案や代案



図 9

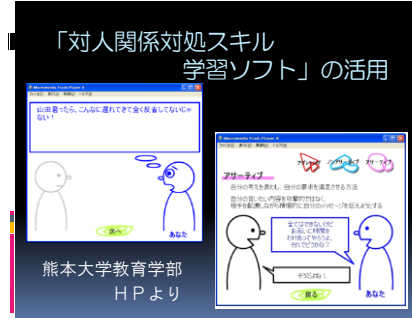


図 10

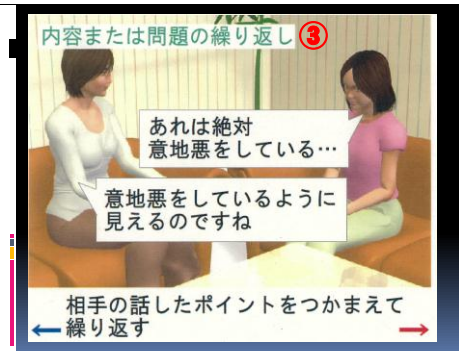


図 11

表 3

<職員の感想> 7月27日、8月10日研修を含む

- ・あたたかいコミュニケーションの取り方をもっともっと学ぶべきである。学校全体で取り組みたい。
- ・人の関わり方を増やすために、こんなにもたくさんの方法があることに驚いた。グルーピング一つでも丁寧にやることで効果が出る。自分でも学んでいく必要がある。
- ・実際に活動してみたので、生徒の立場で考えることができた。みんなが平等に考えることができるよい実践だと思う。
- ・生徒を頭ごなしに叱っていないか、もう一度自分を見つめ直す必要があると感じた。
- ・人との関わりを苦手になっている生徒が多いので、有効な内容だと思う。
- ・自分も相手も嫌な思いをしないのが大事。こういう授業が必要だとは驚きだが、必要性も実感している。

グルーピングの重要性やGWを用いた「人と関わる機会を増やす・関わり方を学ぶ」活動の重要性が実感でき、2学期に全学級で共通してできる基盤を整えることができた。(表3)

ウ 職員会議等 ~Hyper Q-Uの見方、分析の仕方の研修~ (数回)

- ①資料の見方
- ②学校不満足群、要支援群への早急な対応
- ③学級の状況の見方
- ④具体的改善の方法の紹介

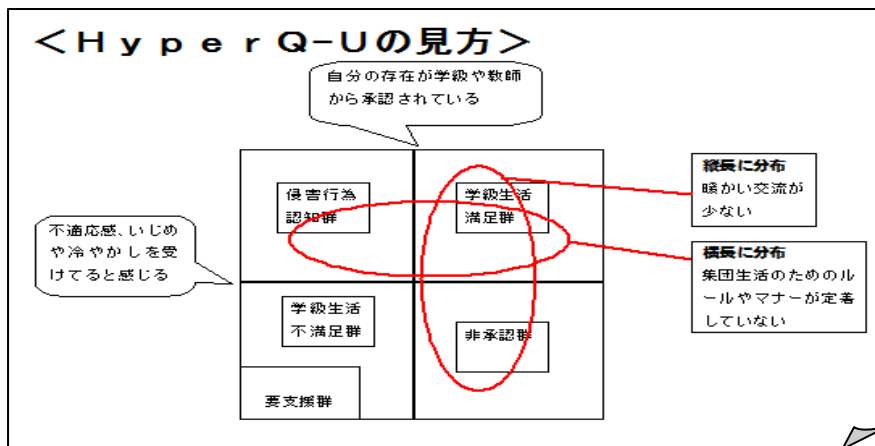


図 12

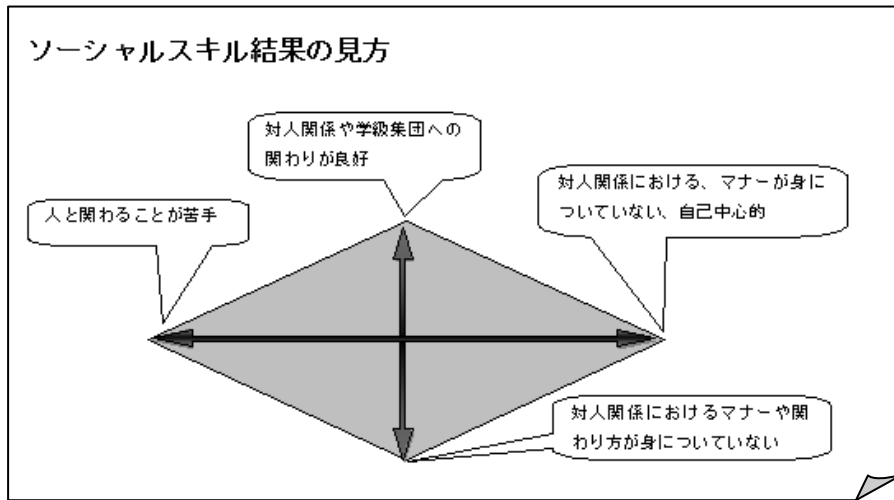


図 13

生徒指導上の諸問題への事後対応だけでなく、学級集団が成熟するプロセスを理解し、現段階の学級がどのような状態であるのかを把握することが重要である。そこで、HyperQ-Uを活用できるように、分布図（図 12）やソーシャルスキル結果（図 13）についてのミニ研修を随時行った。特に、初めて担任になるという職員や、困難を抱えている生徒の理解や班替え等に役に立ったという声が多かった。

## （２）人と関わる機会を増やすGWの意図的な取組

Ⅳ 2（２）イ～エについては同時期に効果的に進められるように、次のような計画で行った。（表 4）

表 4

時期	めざす内容	学活	道徳
		<ul style="list-style-type: none"> <li>● 関わる機会を増やす</li> <li>● 関わり方を学ぶ</li> <li>● 自分の意志を表現する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 友情について意識して考える</li> <li>● 暖かい言葉に出して伝える素晴らしさに気付く</li> <li>● 集団の中の一員としての責任を自覚する</li> </ul>
9月	<b>A</b> 「なぞのマラソンランナー」	<b>D</b> 絵本資料「きみは本当にステキだね」 <b>項目 2 - (3) 友情</b>	
10月	<b>B</b> 「アサーショントレーニング」 ～ジャイアン、のび太、しずかちゃん～	<b>E</b> 企業CM「一秒の言葉～花束言葉を伝えよう～」 <b>項目 2 - (6) 感謝の心</b>	
11月	<b>C</b> 「気になる自画像」	<b>F</b> 各学年副読本 1年「小さな一歩」 2年「明かりの下の燭台」 3年「監督がくれたメダル」 <b>項目 4 - (4) 集団生活の向上</b>	

月 1 回の学活と道徳の時間は、不登校等の未然防止を目的とした学習活動の時間とした。本年度初めて取り組む内容であり、アンケートから見える現 2・3 年生の実態を考慮して、全学年共通の資料や活動内容で取り組んだ。ここでも、研究推進委員会や特活部・道徳部等の年間計画との兼ね合いを考えて会議を重ねて実行した。

ア かかわる機会を増やす活動 ～学活 A 「なぞのマラソンランナー」～



図 14



図 15

6～7 人のグループで一つの絵を完成させる G W を行った。他人にカードを見せてはいけないルールで、自分のカードの内容をグループのみんなに説明しなければならない。(図 14、15)『言葉を使って』説明することが目的である。普段よく関わる友だち同士ではなく、学級の様子をもとに意図的にグループを組んで活動を行うことで、普段話さない人ともたくさん話す機会ができた。(表 5)多くの生徒が言葉を意識して使うことができた。(表 6)

表 5

＜生徒の感想＞

- ・言葉だけで接するのはとても難しかった。普段普通にしゃべっていても、伝わりにくいことがあるかもしれない。だから、ちゃんと伝えたい。
- ・全部は合わなかったけど、いろいろしゃべれて楽しかった。
- ・説明する時、詳しく話さずかみ合わないことがあったけど、やっぱり詳しく話そうと思った。
- ・普段あまり話さない人とも、話すことができて、これからはもっと話題も増やしたいと思った。
- ・最初はあまり話せなかったけど、みんなが入りやすくしてくれてよかった。

表 6 : ワークシート中に下記の内容が記入してある割合(1 学級分)

<b>言葉を用いて伝えることは大切だと思う</b>	<b>87%</b>
---------------------------	------------

イ かかわり方を学ぶ活動 ～学活 B 「アサーショントレーニング」～

普段の会話の仕方から、関わり方の 3 つのタイプを知り、「よりよく伝えるとうまくいく」ことを学んだ。(図 16、17) アサーティブ

な伝え方を実際に体験して、どのように感じたか感想を書いた。職員研修同様に、生徒にとっても大変効果的な活動となった。普段の生活の中で、自分の思いを上手に伝えることで、人間関係が良くなっていくことを学んだ。(表7、8)



図 16



図 17

表 7

＜生徒の感想＞

- ・合唱コンクールの練習では、みんなに強く言いすぎるところがあった。自分の気持ちはきちんと伝えたいけど、もう少し相手の気持ちを考えて伝えたいと思う。
- ・なかなか言えないことも多い。自分の気持ちを表すトレーニングを大切にしていきたい。

表 8 : ワークシート中に下記の内容が記入してある割合(1学級分)

自分のタイプを振り返り、伝え方を変えたい(意識したい)という感想	94%
----------------------------------	-----

ウ 心に響く道徳の授業の実践 1 ～道徳E「資料：感動する絵本の活用」～



図 18



図 19

題材名「本当の友情とはどんなものだろうか？項目 2-(3)友情」で、絵本資料の「きみは本当にステキだね」を活用した。私たち教師が感動する教材でなければ、生徒の心に何かを落とすことができない。だからこそ、生徒の心に響く道徳教材については、常にアンテナを高くして探す必要がある。特に、項目 2-(3)友情については、

学活で「かかわる機会を増やすGW」を意図的に行っているので、自分の身近なことと置き換えて考えを膨らますことができるような資料を活用した。(図 18) また、デジタル教材を作成し、さらに効果的に活用できるようにした。(図 19) しかし、生徒の中には、友だちとの親密な関わりに抵抗を持っている生徒もいることがわかり、道徳的心情の育成には長期的な取組が必要であることもわかった。(表 9) デジタル教材にすることによりより意欲的に授業に参加できる生徒が多かった。(表 10)

表 9

<p>&lt;生徒の感想&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2人のような友達関係ができれば、もっと楽しくなっていく気がする。</li> <li>・今の自分のままだったら、一緒にいて楽しいだけで、本当に自分のことを話せるだろうかと疑問に思った。</li> <li>・伝えたくても伝えられないことがあって、それで嫌な思いをさせてしまって、謝れなかつたりする。だから弱虫なところを直したい。</li> <li>・私は大切だと思う友達から、どう思われているのかな?と改めて感じた。</li> </ul> <p>▲本当のことはなかなか言えないなあ、言う必要性を感じない。</p>
---

表 10：ワークシート中に下記の内容が記入してある割合（1学級）

デジタル教材を活用した道徳に意欲的に取り組める	79%
-------------------------	-----

エ 心に響く道徳の授業の実践2 ～道徳D「資料：企業CMの活用」～



図 20



図 21

題材名「花束言葉を伝えよう項目 2-(6)感謝の心」で、資料としてセイコーCMの「一秒の言葉」を活用した。1秒ほどで言える言葉でも、大きく人を動かしたり、助けたり、勇気を与えたりすることができる。普段使っている言葉をもっと大切にしてほしいと願った授業である。また、友だちや家族、周りの人の些細なあたたかい行動に対して、気付いていてもそのままにしがちであるが、「ありがとう」「助かるよ」等の一言を伝えると、誰でも心がポッとあたた

かくなる。そんな言葉を「花束言葉」と決めて、積極的に花束言葉を使おうという道徳的な実践態度を育成するための授業を行った。

(図 20、21) 生徒の感想でも、人への関わり方を振り返る内容が多く見られた。(表 11、12)

表 11

<p>&lt;生徒の感想&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 普段、ちょっとしたことで「ありがとう」と伝えることはないけれど、言えて良かった。</li> <li>・ なんか照れくさいけど、悪い気持ちではなかった。これからも花束言葉を使っていきたい。</li> <li>・ 普段、僕はナイフ言葉をよく使う。やっぱり花束言葉を使おうと思った。</li> </ul>
---

表 12：生徒の感想（1年2学級分抽出）

言葉での関わり方を振り返る内容を書いていた	65%
-----------------------	-----

オ 相手と自分の良さに気付く実践 ～学活C「資料：気になる自画像」～

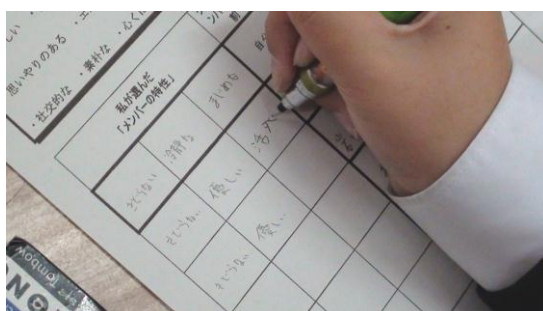


図 22



図 23

自分の良いところ、友だちの良いところを書き、みんなで共有する内容である。(図 22) なかなか自分の良さを書けない生徒が多かったが、友だちから様々な良いところを見つけてもらったことで、自尊感情や自己有用感の向上に繋げることができた。(図 23) ここでも、意図的にグルーピングを行った結果、普段話さない人と話して、今後の関わりに前向きになった発言が多かった。(表 13、14)

表 13

<p>&lt;生徒の感想&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分の良いところは見つけれないけど、友だちのことだったらわかる。自分が思っているところ以外で、良いところを見つけてくれてうれしかった。</li> <li>・ いつもしゃべらない人から良いところを言ってもらった。今度の班替えが楽しみになった。</li> <li>・ 同じクラスになって初めてしゃべった人がいた！今度から話しやすくなった。</li> </ul>
--

表 14：ワークシート中に下記の内容が記入してある割合（1学級分）

良いところを言われてうれしかった、話しやすくなった等の前向きな感想	71%
-----------------------------------	-----

## カ 他者とよりよく生きていくための心情を育成する実践

～道徳F 副読本の活用 項目 4-(4)集団生活の向上～

9月10月の学活・道徳の内容を受けて、授業の一部にA～Eの話題を出すことで、それぞれの活動の意図の関連づけを行った。事前の研修で、このような内容についても説明していたため、教師側が目的を持って授業にのぞむことができた。

### キ SSTや雰囲気づくりのゲーム等の導入

短学活等で活用できる資料を紹介し、いつでも活用してもらえようようにワークシートも配付した。

A～キについての内容を、自立支援担当から提案し、事前に研修を行うことで、どのクラス・どの職員でも安心して取り組む体制ができた。

## ク 生徒の自己有用感を育てるためのリーダー育成

### (ア) 主体的に活動できるリーダーの育成

今年度の体育大会の反省で、現3年生のリーダーシップが低いことが課題として多数上げられていた。前述した2つのアンケート結果から、学校生活への意欲とリーダーシップの高さには相関関係があると考えた。(図1、2) 過年度の3年生と比べると様々な点で意識が低いことがわかった。(図4) そこで、今年度1年生では、学級の枠を取り払い、1学年全体で『リーダー育成プロジェクト』を計画的に行っている。(表15)

表 15

- 集団宿泊に向けた事前学習等をリーダーが行う。  
会の運営以外にも「整列」「講評」も行った。(図24)
- スキル学習の時間を設ける…昼休み・放課後
- 計画・立案からリーダーの意見を取り入れる。
- 学年行事等で「お楽しみ活動」等を行い、達成感を味わった。
- 学習成果発表会等で、新たにリーダーへと成長してほしい生徒へ意図的に全職員で働きかけ、支援していく。
- 職員の団結力を見せる場を設ける。

安心して人前に出る下準備を丁寧に行い、達成感を味わうことができるように、教師は「事前の練習指導」と「困った時に助ける役割」に徹底して努め、できるだけ『生徒主体の活動』となる

ようにした。(図 25、26) リーダーとして育成したい生徒への支援について、予め学年会で討議して共通理解のもと進めた。また、職員も劇等で堂々と発表する姿を見せ、「集中と楽しみ」の両面のモデルを提示したいと考えた。



図 24



図 25

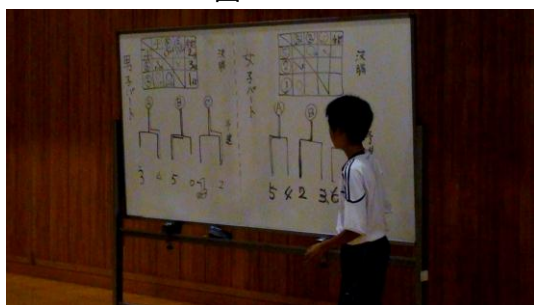


図 26

(イ) 学年全体で行う「徹底指導面」の共通実践

表 16

- 目標をわかりやすい「合い言葉」を学年全体で常に共有した。
- 全クラスで朝の会・帰りの会・給食準備時着席指導・無言掃除指導の共通実践を徹底して行った。
- 全クラス、環境を同じにした。(机や掲示物の配置、班決め)
- 号令のパターン化を行った。(「服装確認、気をつけ、礼」、正座時も「姿勢を正して…」、号令もリーダーが行う。)

学年全体で共通実践することで、ルールや目標がわかりやすくなり、学年のまとまりが出てきた。

### 3 不登校等の生徒へのできる体験を増やす活動の実施

#### (1) 不登校のレベル分けとアプローチ分け

表 17

武蔵ヶ丘中学校 不登校生のレベル分け	
予備軍	A……欠席日数15日～20日未満/年
不登校傾向	B……欠席日数20日～30日未満/年
不登校	C……欠席日数30日～50日未満/年
	D……欠席日数50日～80日未満/年
	E……欠席日数80日以上

表 18

不登校生へのアプローチ分け	
A…15～20日/年	①担任は毎日、必ず本人と会話し、様子を聞く。 ②班の中では居場所づくりをする。(仲のよい・引っ張ってくれる友だちをつける)
B…20～30日/年	
C…30～50日/年	
D…50～80日/年	①2日に1日は家庭訪問をし、心配しているという姿勢を見せる。 ②1学期は週に1日登校、2学期は週に2～3日登校、3学期は毎日登校という長期的な目標を持たせる。(コミセン登校→相談室登校→教科によって教室へ) ③登校したら保護者に連絡し、本人の成長を伝える。
E…80日以上/年	

{ A～C…主に、相談室登校の生徒への自立支援(関わりや体験を増やす活動)  
 { D、E…家庭から外へ出ることができない生徒への個別アプローチは済み  
 →不登校対策委員会で実動中

欠席日数に応じてアプローチを変える取組を不登校対策委員会で重点的に取り組んだ(表17、18)昨年度末は不登校生36名、現在(平成24年12月末現在)では、不登校生は28名である。

#### (2) 不登校傾向の生徒を対象とした活動体験・宿泊体験の実施

～「さわやか・いきいき宿泊体験」7月23日に実施～

ア 目的: 3つの『いきいき』を達成し、個々に自立の力をつける。

- ①自然の中で活動して いきいきと
- ②計画を実践することで自信をつけ いきいきと
- ③コミュニケーション力身につけて いきいきと

イ 参加者: 1年生男子1名と保護者、2年生女子と妹、3年生男子1名、3年生男子1名と学生サポーター、卒業生(以前相談室に通っていて、現在サポート校や高校への通学者2名)、心の教育相談員、適応指導教室指導員、

学校職員 8 名

ウ 場所：菊陽町ふれあいの森研修センター

表 19



図 27



図 28



図 29



図 30



図 31

<1日目>

9:00 (本校集合・健康観察)

9:30 (本校出発)

10:00 (始まりの式)

(諸注意・活動確認・ふれ森館長へ挨拶也)

10:30 (火起こし体験)

11:00 (昼食作り)

13:00 (片づけ、散歩・キャッチボール・バドミントン・  
フリースピー)

14:00 (室内レクリエーション：指導員より)

16:00 (夕食作り：カレーライス)

18:00 (片づけ/サッカー フリースピー)

19:00 (ものづくり体験：砂絵)

21:00 (シャワー・就寝準備)

<2日目>

6:00 (起床 散歩)

7:00 (朝食準備)

9:00 (片づけ 荷物整理)

10:00 (解散式)

10:30 (帰校)



図 32



図 33

様々な活動（表 19）に自由に参加できるようにした。自炊し（図 27）、人と関わる活動を行った。（図 30、33）自分で身の整理をしたり、物作りをしたりする活動（図 29、31、32、34）、火おこし体験（図 28）を通して、「できるかも」「できた」を増やすきっかけにすることができたことは大きな進歩となった。



図 34

#### 4 教育活動全般に渡って自立支援事業の目的を盛り込む

##### （1）関係機関との連携

SSWによる指導・提案（教員にない視点で）もあり、不登校状況が改善する事象も見られる。昨年度は県警OBのスクールサポーターの協力による事例もあったので、様々な関係機関との連携協力をより密にする取組をさらに進めることにした。特に、SSW、SC、町の子育て支援係の方とは随時連携を取りながら、個別の支援を家庭環境も含めて検討している最中である。

##### （2）自立支援事業連絡協議会の参加

武蔵ヶ丘小学校も同様に指定を受けており、より具体的な支援の方向性を検討し、長期的な計画に基づき、身につけるべきスキルを発達段階に応じて洗い出した。特に、中学校においては、既習のスキルを把握し、そこをいかした学活などの授業展開に活用するようにした。

##### （3）スズキ校務ソフトの活用

様々な出来事を担任のみならず、職員の誰もがすぐに記入できるため、保健室での会話やどんな困難を抱えているかを確認でき、すぐに対応できる点で大変良かった。

## VI 研究の成果と課題

### 1 生徒の変容と分析

(1) HyperQ-Uの6月・11月末実施分の比較 (図 17-①、②   の推移)

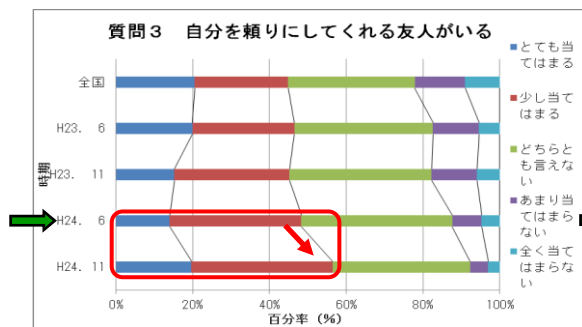


図 35-①

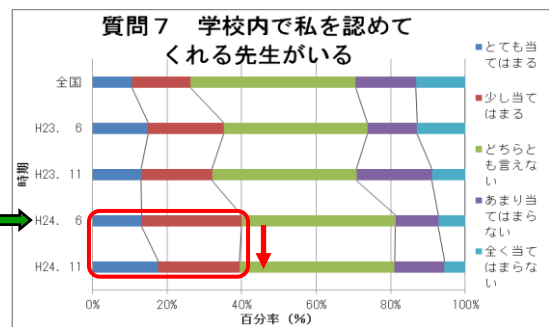


図 35-②

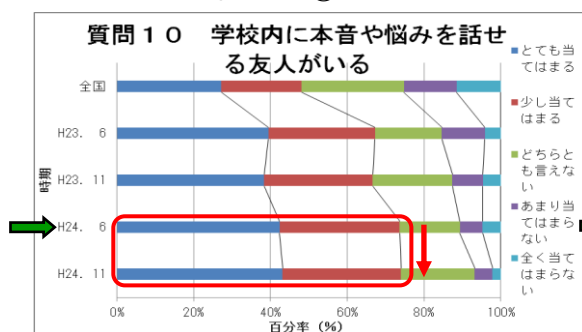


図 35-③

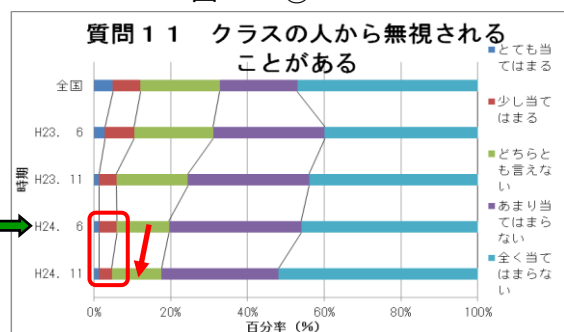


図 35-④

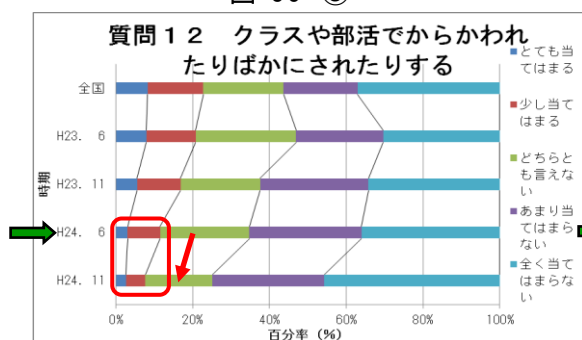


図 35-⑤

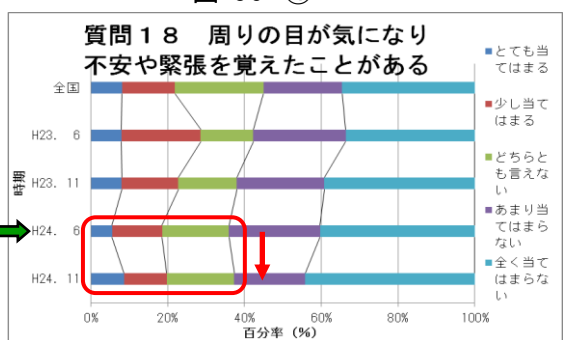


図 35-⑥

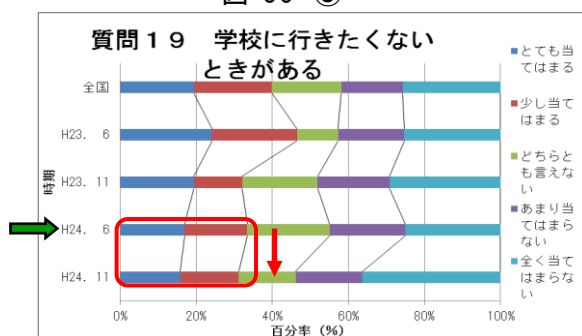


図 35-⑦

ア 自己有用感に関する項目 (図 35-①、④)


調査毎に一定の効果が上がっていることがわかった。

イ 安心できる居場所・自尊心に関する項目 (図 35-②、③、⑤、⑥)

今年度6月に上昇の傾向が見られたが、今回の活動を通して、本

音が話せる友人や認めてくれる教師が増える結果には至らなかった。また、学校生活において緊張感を持って生活している状況は変わらなかった。しかし、学級等で馬鹿にされることは少なくなった。

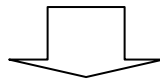
#### ウ 不登校傾向、登校への意欲減退傾向に関する項目（図 35-⑦）

登校への抵抗がない生徒が増えた。しかし、どちらとも言えない生徒を除き、「学校に行きたくないときがある」と答えた生徒の数（）は変化がなかったことから、不安感や困難さを抱える生徒には効果が低かったことがわかった。

## 2 成果と課題の分析

### （1）成果

- 職員の意識は大幅に変容した。「意図的に仕組む活動」の重要性を周知することができ、グループワーク等に不慣れな職員のスキルアップに繋がった。生徒の実態に応じた内容で、今までにない内容の研修を行うことができた。
- 活動に不慣れな職員の担任するクラスでも共通実践が行えた。
- 普段話すことが少ない友だちと関わる機会が増え、学校行事等でもこれをきっかけとして協力して意欲的に取り組む姿が見られた。
- 自己有用感が向上し、安心して学校生活を送る土台をつくるきっかけとなった。
- 若干ではあるが、安心してできる居場所となる学級・学校（職員）へとベクトルが向き出した。
- 全学年 HyperQ-U を 2 回/年調査することで、各学級の実態にあった方法で、学級集団を成熟させていく道筋を考え、スモールステップで具体的に取り組むことができた。

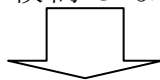


心の居場所づくりのきっかけ、自己有用感の向上

### （2）課題

- △学級内にいる、不安定な要素や困難さを抱える生徒にとっての効果が低く、もっと手厚いアプローチが必要であった。
- △学級への不登校等の未然アプローチの中心が、学活・道徳になった。今後は、教科指導の点でも、学校全体で魅力ある授業・わかる授業を目指した取組が必要であると感じた。
- △不登校・不登校傾向の生徒への個別のアプローチを不登校対策委員会と連携しながら取り組んだが、依然として数が多いことから、長

期的、且つ、計画的に取り組む必要性を痛感した。  
△学校復帰のためのプログラムや「別室登校ダイアグラム」等、個別の支援に重点を置いた取組を検討しなければならない。



心の居場所となる学級での活動、魅力ある授業のさらなる取組の必要性  
不登校生等への個別の支援の在り方の再検討

## Ⅶ 今後の研究の方向性

今後は以下の2点についてさらに研究を深めたい。

### 1 意図的な活動の内容をさらに深める

…心の居場所づくりや人との関わりを考えた年間計画の作成

- (1) 特活部・道徳部との連携、各学年毎の年間計画を作成
- (2) 各学年の生徒の実態の正確な分析、取組内容の変更
- (3) 職員研修のさらなる充実

### 2 不登校生徒への個別の支援の充実

- (1) ダイアグラムの活用等、新たな個別のアプローチの検討
- (2) 全職員での協力体制づくり

本研究を振り返り、生徒一人一人の心の居場所づくりの難しさと、個別の支援の必要性を感じた。また、長期的・計画的に学校全体で進めていかなければならないと痛感した。生徒の生きる力を育成していくためにもピースメソッドの手法を活用し、本研究をスタート地点として、生徒が心豊かで活力ある人材へと成長できるように、日々の教育実践と研究に努めていきたいと思う。

## Ⅷ 参考文献

- ・『中学校学習指導要領』文部科学省 平成20年3月告示
- ・『中学校学習指導要領解説』文部科学省 平成20年9月
- ・『中学校学習指導要領解説 道徳編』文部科学省 平成20年9月
- ・『PISA2009年調査分析資料』国立教育政策評価研究所 平成22年12月
- ・『学級集団づくりのゼロ段階』河村茂雄 平成20年7月
- ・『エンカウンターで学級が変わる ショートエクササイズ集1、2』図書文化 平成23年11月
- ・『「アサーショントレーニング」指導プログラムの開発に関する調査研究』埼玉県立総合教育センター 平成23年3月
- ・『問題事象の未然防止に向けた生徒指導の取り組み方』国立教育評価研究所 平成22年6月

(2) 武蔵ヶ丘小学校の取組

1 研究主題について

(1) 研究主題

共に認め合う、心豊かで活力ある児童の育成  
 ～豊かな心の育成を土台とした学力・心の居場所づくり～



異学年交流活動

(2) 児童の実態

① 学級編成

学年	1	2	3	4	5	6	特別支援学級				計
	学級数	3	3	3	3	4	知的	自閉症	難聴	肢体	
児童数	95	105	117	119	103	130	4	5	2	1	681

② 学力面

概ね良好であるが、学力が2極化し、学力低位児童へのきめ細かな指導を必要とする。

③ 生活面

校区は、県営団地、光の森地区である。家庭環境は多様であり、個別の対応を要する児童の数も多い。児童は明るく元気である。しかし、きまりを守ろうとする規範意識やあいさつなどの基本的な生活習慣の定着に個人差がある。複雑な家庭状況の中で、通学している児童もおり、きめ細かな配慮を要する。

④ 特別支援教育

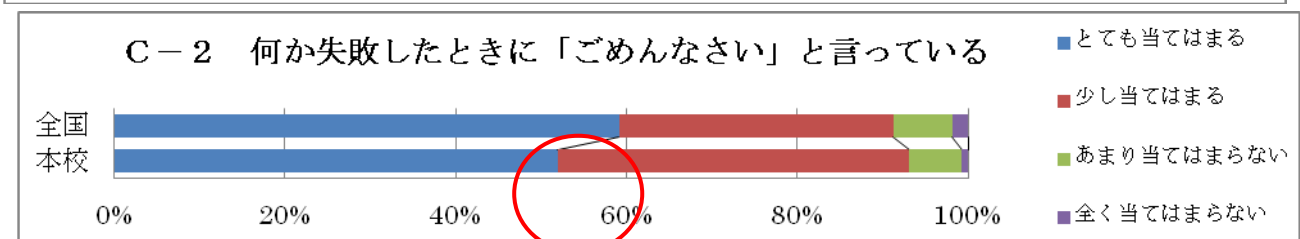
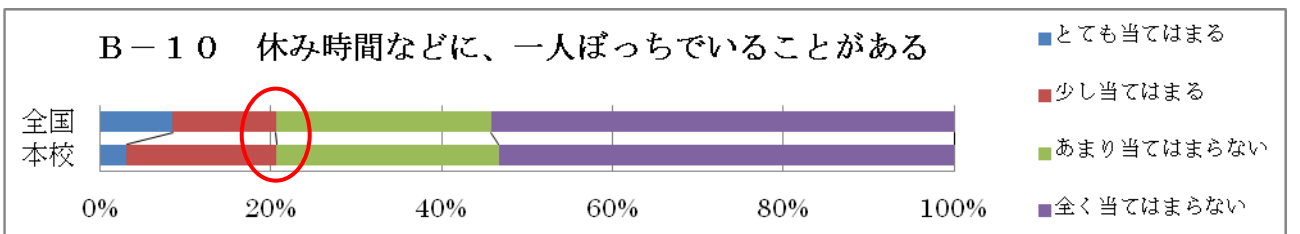
発達障がい診断を受けた児童や配慮を要する児童が、各学級複数名おり、良好な人間関係づくりのために、個別支援計画・指導計画に基づいたきめ細かな指導が必要である。

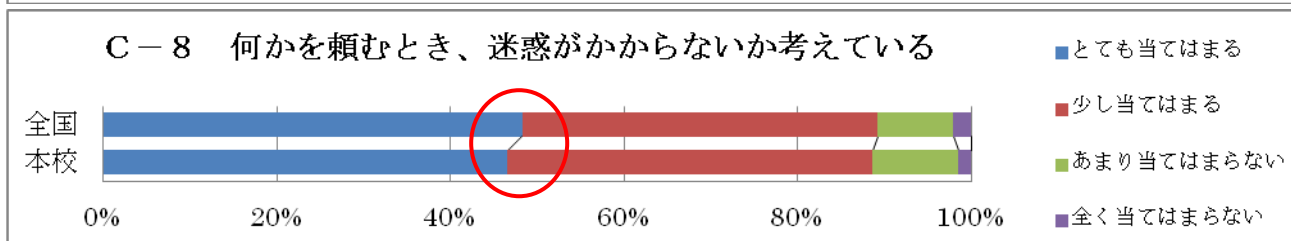
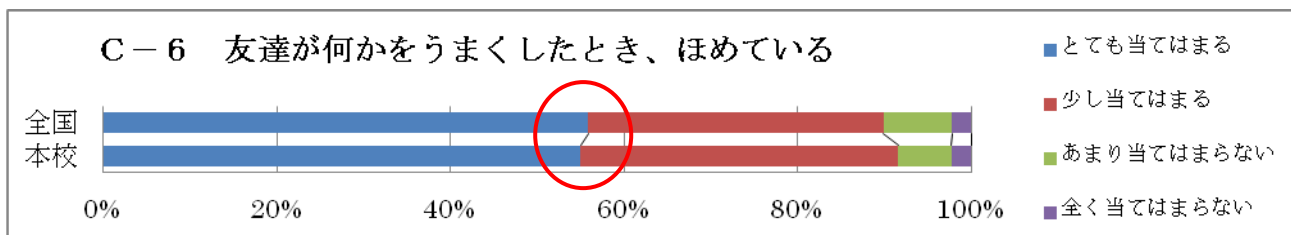
(3) 不登校の現状（平成24年12月末現在）

	不登校	適応教室通学	保健室登校	登校が遅れ気味の児童
平成23年度	1人	1人	3人	6人
平成24年度	2人	0人	3人	11人

(4) 平成23年度、4・5年生実施、hyper-QU（以下QU）の結果から研究の仮説へ

以下の4つの項目に課題が見られた。（H24.11月実施）





- 「休み時間一人ぼっち」で、学級に居場所がないと感じる児童が、2割程度いる。
- 人間関係を円滑に進める「ごめんなさい」を素直に言える児童が、半数強である。
- 友だちのよさを積極的に認められる児童が、半数強である。
- 相手を思いやりながら頼みごとをする児童は、半数弱である。



**研究の仮説**

- 仮説1** : 学級生活の中で、級友（ピア）同士が助け合う（サポート）、ペア・グループ活動とよさを認め合う場面を設定することで、関わりが深まり、共に認め合い、支え合う、一人一人に居場所のある学級ができるのではないか。
- 仮説2** : 不登校気味の児童へ、不登校対策委員会を中心とした学校総体としての早期支援態勢を構築して取り組めば、不登校の未然防止につながるのではないか。

**(5) 具体的方策**

① **仮説1** に関して (人間関係づくり)

- ア 学期に1回、ピア・サポートやグループエンカウンターを実施する。
- イ 授業過程にペア・グループ活動を位置付ける。
- ウ 「学級遊び」の日を設定し、人間関係づくりを行う。
- エ 帰りの会で、お互いのよさを出し合う「今日のきらりさん」を実施



する。

オ 帰りの会で、他者はもちろんのこと、自分自身のよさも認める「自分のハートに丸」を実施し、自尊感情を高める。

カ 月1回の児童集会や異学年交流での集団ゲームを通じて、人間関係の輪を広げる。

② **仮説2** に関して (学校復帰に向けたプログラム)

- ア 月1回、不登校対策委員会を開催し、気になる児童への具体的な支援策を協議する。
- イ 週1回の学年主任会で、各学年の不登校等の問題について情報を共有し、学年での支援策の効果について話し合い、必要に応じて改善策を協議する (三者会議へつなぐ)。

ウ S S W、S Cや町相談員、児童相談所

## 2 研究の実際

### (1) 児童の意識の変容を見るアンケート

(ふりかえりカード：右図)

#### ① 内容 (Q U課題との関連項目)

項目 8 : 「ごめん」を言える

項目 10 : 友だちを助ける

項目 12 : 友だちをほめる

項目 15 : お願いする

項目 16 : 自分のことが好き

項目 18 : 友だちをさそう

#### ② 実施時期

ア 5月下旬 (2年以上の全学級)

ピア・サポート実施前

イ 11月末 (2年以上の全学級)

グループエンカウンター実施後

### (2) 6年生の実践

#### ① 平成23年12月実施のQ Uの結果

学年全体では、アンケートの37項目中、全国平均に比べ望ましい方向にある項目が16あり、概ね良好であった。また、学級生活不満足群が16%と全国平均26%よりも低い。

#### ② 中学校進学へ向けての課題解決

6年生は、不登校1人、保健室登校2人、登校が遅れ気味の児童6人がおり、中学校進学に向けて、きめ細かな対応が必要である。

学年全体としては、課題を「友人関係や学級の中でトラブルが発生した際に、自分の気持ちを相手に上手に伝えることができないために、関係が悪化し、学級に居づらさを感じてしまう」とことと捉え、6月にピア・サポート「上手な自己主張」を実践した。

#### ③ 1学期：「ピア・サポート「上手な自己主張」」の実践の内容 (学活の時間、全4時間)

☆1時間目：4種類の自己主張

4つの自己主張について知る。

1 攻撃パターン1

2 攻撃パターン2

3 受け身パターン

4 上手パターン

☆2時間目：上手な自己主張

☆3時間目：自己主張3つの柱

1 言葉

2 声

3 体

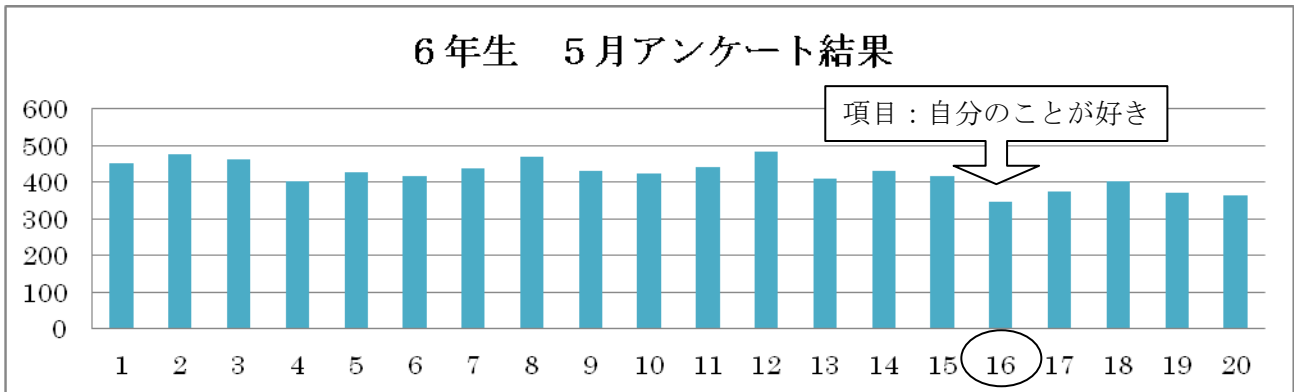
ロールプレイで  
スキルアップ

			とてもいい	まあまあ	あまり	ぜんぜん
ルールを守る。	1. 友だちと遊ぶときにルールを守る。	4	3	2	1	
	2. 友だちとの約束を守る。	4	3	2	1	
	3. 物をかりるときには、許可を得る。	4	3	2	1	
聴く。	4. 話す人を見て聴く。	4	3	2	1	
	5. 最後まで聴く。	4	3	2	1	
声かけ。	6. 友だちに自分からあいさつをする。	4	3	2	1	
	7. 友だちには自分から話しかける。	4	3	2	1	
	8. 友だちに「ありがとう」「ごめん」を言える。	4	3	2	1	
周りの配慮。	9. 友だちの様子をみて、その友だちの気持ちを考える。	4	3	2	1	
	10. 困っている友だちを助ける。	4	3	2	1	
	11. 友だちが失敗したら、はげます。	4	3	2	1	
	12. 友だちを「すごい」「じょうず」とほめる。	4	3	2	1	
自己主張。	13. 友だちに反対の意見が言える。	4	3	2	1	
	14. 友だちでも、無理なお願いはことわる。	4	3	2	1	
	15. してほしいことをお願いする。	4	3	2	1	
	16. 自分のことが好き。	4	3	2	1	
誇る。	17. ひとりである友だちに声をかける。	4	3	2	1	
	18. 自分から友だちをささう。	4	3	2	1	
解決。	19. 友だちのことでいやなことがあったとき、がまんしない。	4	3	2	1	
	20. 悪口を言われても相手にしない。	4	3	2	1	



☆4時間目：自己主張名人

④ 5月末実施の「ふりかえりカード」の分析



●6年生では、20項目中「自分のことが好き」の評価が一番低かった。



⑤ 2学期：グループエンカウンター「いいところ探し」の実践内容（1時間）

☆「いいところ探し」

- 1 まず、自分の名前を用紙に書く。
- 2 その後、名前の書かれたカードをランダムに配る。
- 3 配られたカードの友だちのよさを見つけて書く。
- 4 みんなの前で友だちのよさを発表する。



◎その後、定期的に「いいところ探し」を実施する。

級友から自分のよさを言われたことで自己肯定感が高まり、「自分のことが好き」になる。

(3) 1学期に実施したピア・サポートの内容

学年	次	タイトル	次	タイトル
1年	1	あいさつ上手になろう	3	きき上手になろう
	2	もっとあいさつ上手になろう	4	もっときき上手になろう
2年	1	あいての話を上手に聞こう	3	上手な話し方をしよう
	2	あいての話をたくさん聞こう	4	おねがいのしかたを知ろう
3年	1	気持ちをあらわす言葉を知ろう	3	言葉の大切さを知ろう
	2	体の変化をみて人の気持ちを考えよう	4	自分の気持ちを言葉にしよう
4年	1	感情って何？	3	落ち着け！感情！
	2	感情ってふくざつ！！	4	伝え合おう！この感情！
5年	1	ちょっと待って、その先を考えよう	3	問題はどこだ
	2	考えよう、解決法はもっとある	4	じっくりちょうせん
6年	1	自己主張ってなに？	3	上手に自己主張
	2	何て言おうかな	4	めざせ自己主張上手

(4) 6月ふりかえりカード等の分析で明らかとなった各学年の課題→2学期の実践

1年生 「きまりやルールを守る」

2年生 「友達に進んで声をかける」

3年生 「お願いしたり断ったりする」

4年生 「嫌なことがあったら解決する」

5年生 「嫌なことがあったら解決する」 6年生 「自分のことが好き」

◎「ふりかえりカード」等の分析から、2学期に各学級で取り組んだ内容

S G E・・・構成的グループエンカウンター S S T・・・ソーシャルスキルトレーニング

年	組	アンケート項目	内 容	教科等
1	1	1	○S S T 「どうぞ ありがとう」	学活
	2	3	○朝の会・帰りの会（「きまりはなんのため」）	日常
	3		○S G E 「なかなかおりカード」	学活
2	1	6 1 7 1 9	○週に1回、みんなで遊ぶ日を設ける。 ○帰りの会で問題解決の機会を設ける。	毎週 日常
	2	1 0 1 6	○S S T 「ナイスフォロー」「ありがとうをかえそう」	学活
	3		○S G E 「ほめあげ大会」	学活
3	1	6	○S G E 「人にしてもらったこと、人にしてあげたこと」	学活
	2	1 5	○S S T 「あいさつりレー」	週1回
	3	1 1 1 3 1 4	○S S T 「もしもの人生の切り札」 ○S S T 「お得な切り札」 ○ほめるときの言葉やアクションを練習	学活 学活 日常
4	1	1 1 1 6 1 9 2 0	○S S T 「見る目、聞く耳、話す勇氣」 ○S S T 「はげまし上手 声かけ上手」 ○S G E 「自分への手紙」「ほめあげ大会」	学活 学活 学活
	2	1 3 1 9 2 0	○S S T 「上手な断り方」 ○S S T 「さそい上手 さそわれ上手」	学活 学活
	3	2 1 9	○アサーション「あたらしい仲間をつくろう」 ○アサーション「失敗してもだいじょうぶ」	学活 学活
5	1	1 5 1 7	○S S T 「一枚上手の誘い方誘われ方」 ○S S T 「友情を壊さない頼み方」	学活 学活
	2	1 5 1 9	○S S T 「友情を壊さない頼み方」 ○S G E 「無人島 SOS」	学活 学活
	3	1 5 1 9	○S S T 「友情を壊さない頼み方」 ○S S T 「してもらいたいこと十人十色」	学活 学活
6	1	1 6 2 0	○S G E 「いいところさがし」 ○S S T 「腹がたってもカーッとした態度をとらない」	学活 学活
	2	1 6 2 0	○S G E 「いいところさがし」 ○S S T 「腹がたってもカーッとした態度をとらない」	学活 学活
	3	1 6	○S G E 「友達によさ見つけ」 ○各月ごとに班員のよさ見つけ	学活 日常
	4	1 6 1 7	○S G E 「クラスのためにがんばっている人さがし」 ○自分と友達のいいところさがし ○週3回のモーニングドッジ	学活 日常 日常

(5) 帰りの会で「自分のハートに丸」の実践

- ① 全校一斉に実施する。
- ② 2学期のグループエンカウンター実践後に実施する。
- ③ 帰りの会で、自分がその日に「がんばったこと、よくできたこと」を探して、ハートの中に書いて。丸で囲む。
- ④ 自分のハートに5つの丸ができて、自尊心が高まる。



☆子どもの感想

- 字がていねいにかきました。(1年生)
- 友達に優しくできた。(2年生)

(6) 朝の学級レクリエーション (全校一斉)

- 月・・・手押し相撲
- 火・・・背中を合わせて立つ
- 水・・・しり相撲
- 木・・・じゃんけんゲーム
- 金・・・あいさつゲーム

おはようございます。



☆子どもの感想

- みんなでゲームをしてとても楽しかった。
- 休み時間、一緒にゲームをして遊びたい。

(7) 毎月1回の児童集会での7分間の集団ゲーム

1	ウルトラじゃんけん	2	あいさつゲーム
3	○×ゲーム	4	じゃんけん列車
5	伝言ゲーム	6	サイレントゲーム
7	10人に自己紹介	8	言葉は大事

他学年との交流の場として、児童会運営委員会が、毎回ゲームのめあてを決めて工夫して取り組む。

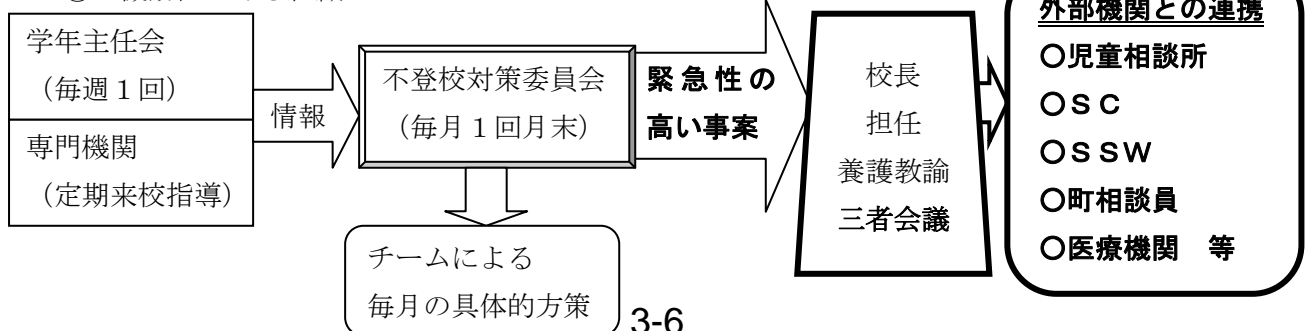
2学期のめあては、「指示を静かに聞いて、他の学年5人以上の人と、仲よく活動する。」



○○です。よろしくね。

(8) 学校総体としての不登校対策

① 機動性のある組織



② 不登校対策委員会

ア 毎月1回実施（40分間）

イ メンバー：学校長、教頭、養護教諭、各学年代表、自立支援担当

ウ 協議内容

- 各学年からの報告（不登校、問題行動、家庭環境等）
- 当該児童の情報の共有化
- 当該児童への対応検討、具体的な取組の計画立案
- 学校全体としての取組の確認

エ 運営の工夫

- 養護教諭が、日常的に情報を収集し、協議する児童を絞り込み、協議資料を作成する。
- 気になる児童に関しては、事前に外部機関（「輝なっせ」「SSW」）と連携し、授業参観を依頼し、特性等を見極める。（本年度5回実施）

第6回 いじめ・不登校等対策部会 11月16日（木）

1. メンバー  
 校長 教頭 上野 原田 内田 奥野 宮田 金澤 高橋  
 必要な人が参加

2. 子供の状況・取組み（11月15日現在）

	登校しぶり（傾向）	気になる親子関係	気になる行動	取組み
1年	Aさん Bさん *早く来る日も出てきた		Cさん 相手やまわりのことを考えた行動がとれない	
2年	Dさん *集団に入れない 来年度支援学級希望 Eさん *放課後はエルピア		Fさん Gさん	

オ チームでの対応

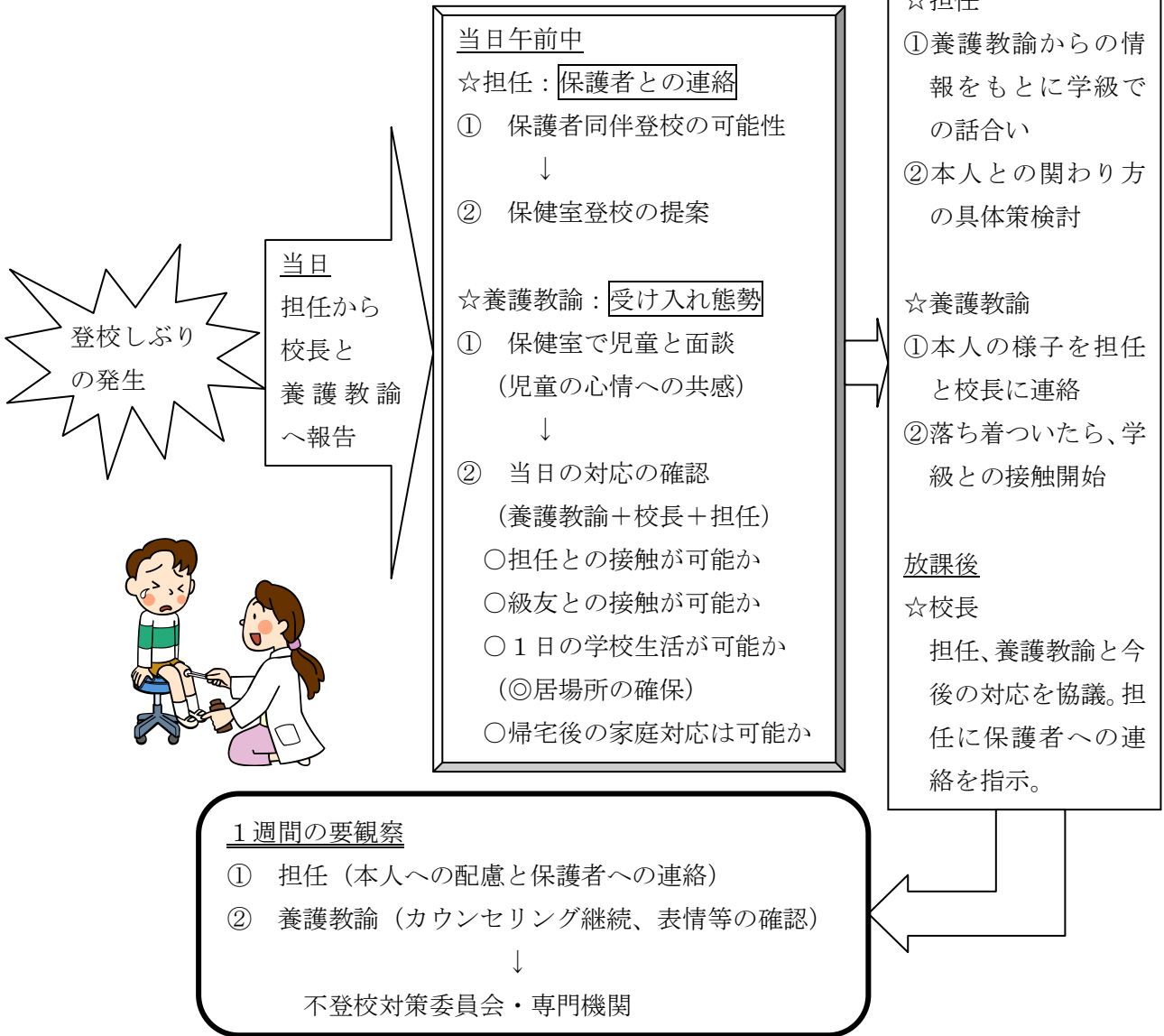
- 学年、専科、少人数、町支援指導助手、養護教諭、学習サポーター、管理職等を含めて複数での支援態勢を組織する。

カ 記録の活用（気になる児童一人一人の記録を残し、改善策を練る：校長が作成）

( )年( )組 名前( )		
◎キーパーソン：母親		外部機関：町相談員とSSW
月日（曜日）	内容	対応
5月〇日（〇）	家庭内暴力の疑い 5月〇日（〇）から1週間休み。  *ケース会議後、登校する。	○ケース会議 校長、教頭、養護教諭、担任教諭、前担任教諭 家庭訪問の実施（児童との面会）
9月〇日（〇）	友人関係の問題で再び登校できない。	○児童相談所に相談（校長から） ○民生委員との連携 家庭状況が厳しく、見守りが必要
11月〇日（〇）	1週間に2～3回、午後から図書室へ登	○両親との面談（町相談員も参加）

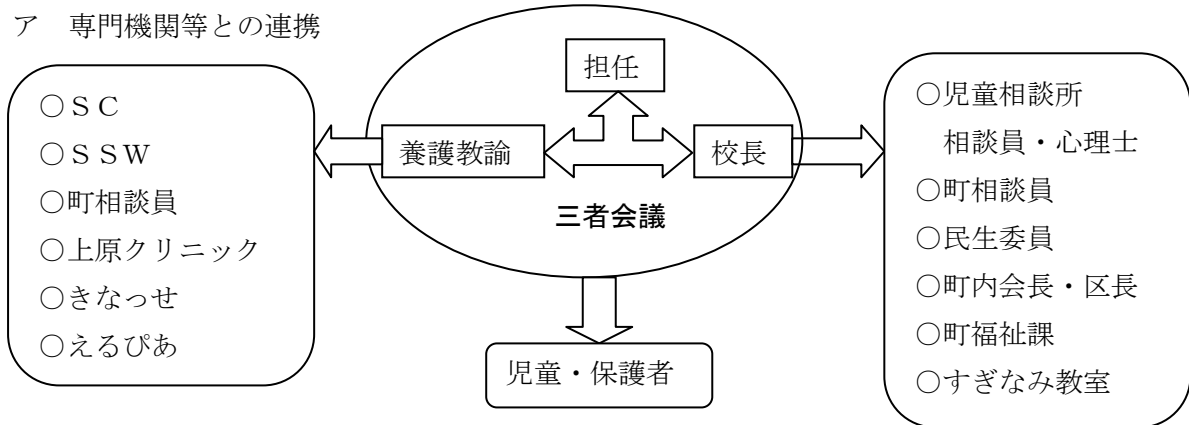
	校。	今後の対応について協議
--	----	-------------

③ 三者（養護教諭＋校長＋担任）会議による即応態勢



④ 不登校児への長期的対応

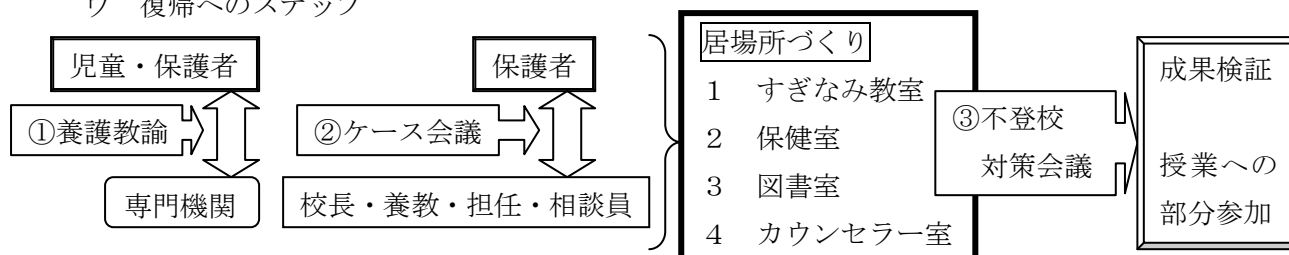
ア 専門機関等との連携



イ 中学校進学に向けて

6年生の不登校、登校しぶり、保健室登校等の保護者と、夏休みにケース会議を実施。

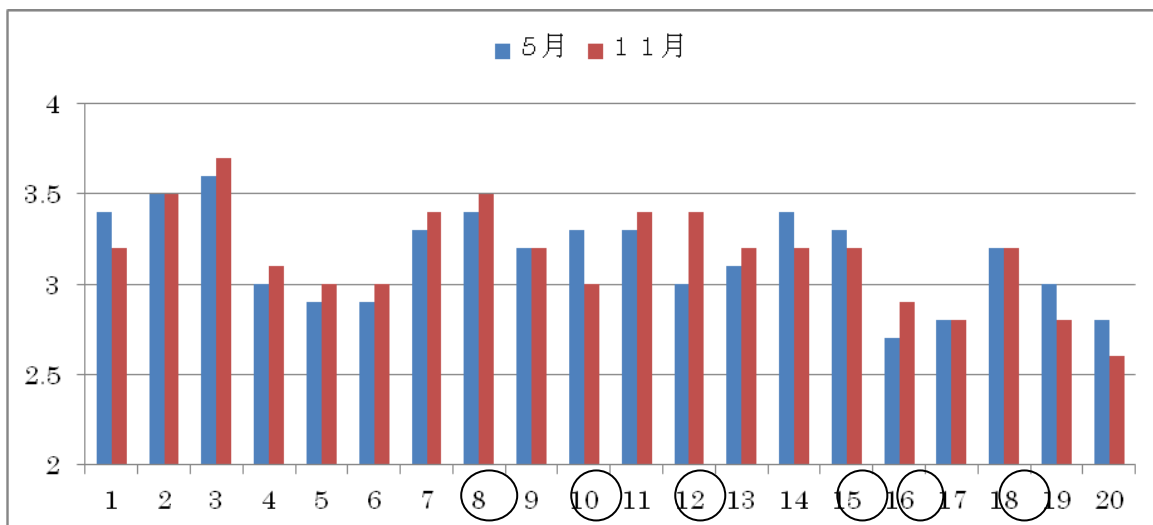
ウ 復帰へのステップ



3 成果と課題 ( ☆ : 成果 ● : 課題 )

(1) 仮説1に関して (人間関係づくり)

① ふりかえりカードから (6年生の例: 5月と11月の比較)



ア 項目 8: 「ありがとう」「ごめん」を言える

☆素直に感謝したり、謝罪したりする児童が増加した。

イ 項目 10: 困っている友だちを助ける

●5月より低下しているため、原因を探り、3学期に具体的な取組を実施していく。

ウ 項目 12: 友だちをほめる

☆グループエンカウンター「いいところ探し」の効果が現れている。

エ 項目 15: お願いする

●5月より低下している。

オ 項目 16: 自分のことが好き

☆「いいところ探し」や「自分のハートに丸」の効果が現れている。

カ 項目 18: 友だちをさそう

◇変化は見られない、中学校進学に向けて、学級内の絆を強める取組を実施していく。

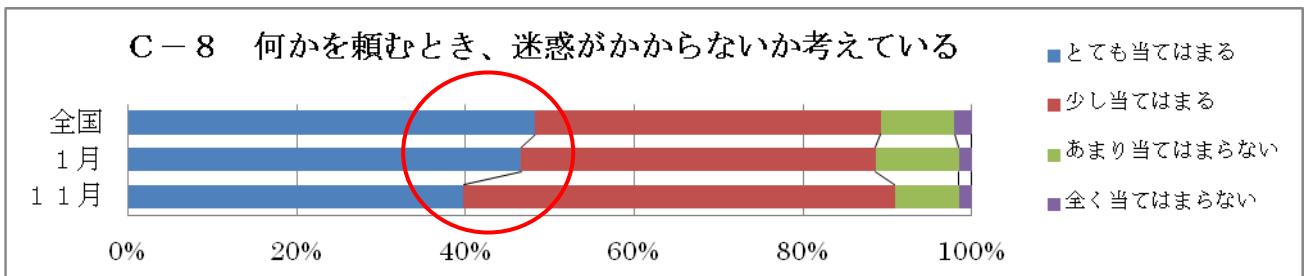
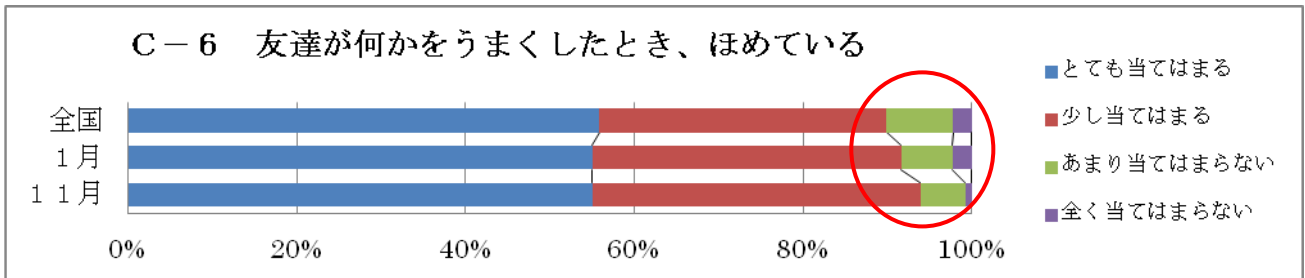
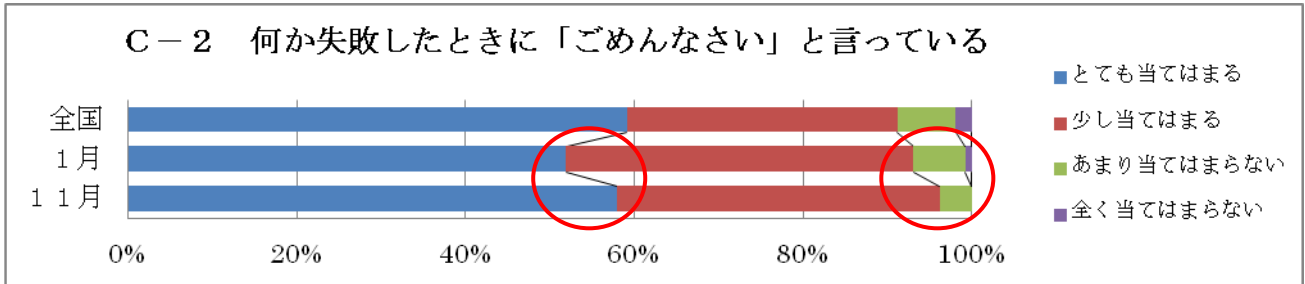
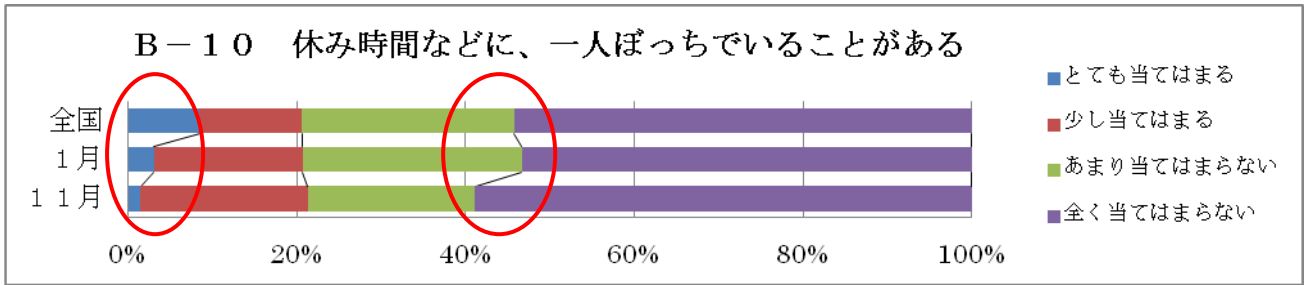
キ 項目 20: 悪口を言われても相手にしない

●ピア・サポート「上手に自己主張」とも関連する項目である。トラブルを話し合いで解決していく際には、上手な自己主張が重要となる。日常的・継続的に指導していく。

☆ 「ふりかえりカード」の比較分析から、授業や朝の活動等で、人間関係を育成するピア・サポートやグループエンカウンターに計画的に取り組んだことで、確実に効果が現れた。

●5月より落ち込んでいる項目について、優先順位を付けて具体的に取組んでいく。

② 6年生のQUから（5年時：平成23年1月処理 6年時：平成24年11月実施）



☆「休み時間一人ぼっち」で、学級に居場所がないと感じる児童数が、減少した。

☆人間関係を円滑に進める「ごめんなさい」を素直に言える児童が、増加した。

☆友だちのよさを積極的に認められる児童が、増加した。

●相手を思いやりながら頼みごとをする児童は、増加が見られない。



☆ピア・サポート、グループエンカウンター、集団遊びの取組により、学級の中に、児童の居場所ができつつある。（**仮説1**の達成）

●5月・11月のふりかえりカードの分析により、各学級の課題が明らかになったため、3学期の取組を、さらに工夫していく必要がある。

(2) **仮説2**に関して (学校復帰に向けたプログラム)

① QUの個人票の活用

6年生のI男は、読解力に課題があり、5年当初は、遅刻や欠席が目立っていた。

5年時のQUの結果では、以下の特徴が見受けられた。

ア **学級満足度**：やや低い

いじめや悪ふざけを受けているか、トラブルを起こす可能性が高い。

イ **学校生活意欲**：低い

学習意欲が低く、学力検査の結果も低い。

ウ **友達関係**：低い

気軽に話し合える級友が少ない。

エ **学級の雰囲気**：低い

学級に居場所がないと感じ、学校に行きたくないと思う。

オ 個人票 (平均値は、正三角形)

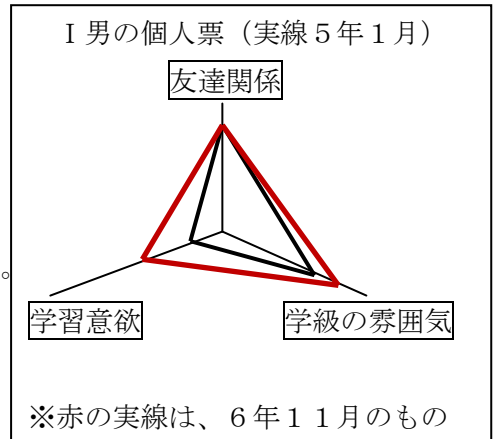
学習意欲が極端に低くなっている (いびつな三角形)。

☆これらの結果から、学級担任は、以下の取組を実施した。

ア I男と関係づくりができそうな級友を同じ学習班にする。

イ I男の苦手な読解力に配慮して、授業の中で個別指導を行う。

ウ 保護者の承諾を得て、専門機関へつなぐ (定期的なケース会議の実施)。



☆表面上は見えていなかったI男の学習意欲の極端な低下が、QUで明らかとなった。その結果を、教師が真摯に受け止め、授業中に個別指導するとともに、本人の能力に合わせた家庭学習の課題を出したことで、本人も少しずつ学力が向上し、学習意欲も向上してきた。

☆保護者と面談し、専門機関へつなぎ、I男が、月1回のカウンセリングを受けたことで、本人が自分の得意と不得意を理解し、「得意な面を伸ばせばよい」と自覚したことで、自尊感情が高まり、6年生では、全ての活動に前向きに取り組み、欠席もほとんどなくなった。(仮説2の達成)

●読解力に課題があるため、進学に当たって中学校との十分な連携をとっていく。

●失敗に対して極端に落ち込むため、気持ちの切り替え方について、今後も指導していく。

② 即応態勢

毎月、登校しぶりが発生 (1年2人、2年4人、3年1人、4年2人、5年2人、6年2人)。

ほとんどが、保護者が泣いている児童を車で学校まで送ってくる。

ア 正門で登校指導をしている校長が、職員室の教頭へ一報 (教頭が、担任と養護教諭へ連絡)。

イ 泣いている児童を保健室へ入れる。

ウ 児童は養護教諭、保護者は担任が対応する。

エ 教室への入室を強要せず、保健室で落ち着くのを待つ。

オ 本人が泣き止んだ段階で、養護教諭が聞き取りを行う。

カ 本人と養護教諭で、1日の過ごし方を話し合う。

☆ほとんどのケースが、学級の間人間関係からの登校しぶりであり、養護教諭が悩みを聞き取り、担任・級友とつなぐことで、次の日から学級へもどれた。

### ③ 長期化した不登校への対応

#### ア 保護者との関係づくりを最優先に

保護者は家庭で、担任は学級で様々な取組を行うが、それでも本人の登校意欲が高まらない場合、保護者、担任、不登校傾向の児童の精神的な疲労が積み重なっていく。そこで、それぞれが相談しやすい人を見つけて、ケース会議でつなぎ、ストレスの軽減を図る。

☆保護者の相談窓口を複数用意する（ケース会議に参加を依頼し、顔合わせ）。

養護教諭、校長、町相談員、S C、S S W、医療機関（上原クリニック）、児童相談所  
☆担任以外が、保護者と定期的に連絡を取り合う。

養護教諭か校長、町相談員

#### イ 専門機関とつなぐ

ケース会議の中で、S S W等が保護者へ専門機関への相談を勧める。

#### ウ 児童の意欲を優先する

保護者と十分相談しながら、本人の可能な形で、学校復帰へのタイミングを計る。



☆学校との連絡は密にできている（校長、養護教諭、担任が交替で保護者と連絡相談）。

●3学期の登校について、保護者と連携して、可能な範囲で登校刺激を行う。

### (3) 不登校ゼロを達成するために

#### ① 原因追及よりも、児童の困難さに共感して、具体的な取組を

##### ア 保護者が悩みを気軽に相談できる窓口を

- 保護者が我が子に関して抱く不安に応えられる窓口を
  - ・保護者の我が子への見立てから適切な専門機関へつなぐ助言
- 家庭の問題に適切な助言を
  - ・経済的、精神的、家族関係等の諸問題の解決に向けた相談窓口
- 保護者自身の困難さに向き合い、サポートする態勢を
  - ・保護者自身の困難さの軽減

##### イ 児童の特性に応じた診療・療育を

- 児童が必要に応じて適切なカウンセリングを受けられるように
  - ・S Cの配置と時間数の見直し、または、診療機関の受診態勢の充実を
- 発達障がい等の特性がある場合は、適切な療育を受けられるように
  - ・療育機関と学校との連携の強化

#### ② 担任へのサポート態勢の充実を

##### ア 担任自身へのカウンセリングの充実を

##### イ S S W、S Cへの相談が気軽にできるように配置と時間数の増加を

##### ウ 支援チームの充実を

- 一定期間、S S WやS Cが担任と協力して集中して取り組めるようなシステムの改善を

#### ③ 研修の充実を

不登校が解消された事例や対応困難事例に関する職員研修を実施し、学校教育の中で不登校

#### 行政の体制づくり

- 教育委員会と福祉課が連携し、学校へのサポートを。
- 担当者の配置と行政主導でケース会議を。

解消に向けて、どのような対応が効果的か、常に問題意識をもち具体策を立て、検証していく。

### (3) 教育委員会の取組

#### ① 取組の実際

##### ア 担当者会の開催

- ・町自立支援連絡協議会(本年度 8月、10月、12月開催)
- ・「すぎなみ教室」「中学校相談室」との連絡会(本年度 7月、8月開催)

##### イ 不登校対策研修会の開催(本年度 11月開催)

- ・各小中学校の校長、不登校対策担当者、養護教諭、教育相談員(すぎなみ教室、各中学校)、町教育委員会及び町福祉課関係者(35名)
- ・武蔵ヶ丘小学校、武蔵ヶ丘中学校、すぎなみ教室、中学校教育相談員からの実践発表

##### ウ 人的支援

###### ・学習サポーター

平成14年度から配置(当初10名)

本年度は11名の配置

原則として小学校に1名、中学校に2名(数学と英語)配置

勤務時間は毎日4時間

小学校は原則として4年生と6年生の算数で、中学校は3年生の英語と2年生の数学で活用

###### ・特別支援指導助手

平成15年度から配置(当初6名)

本年度は32名配置

平成20年度からは毎年4名ずつの増員

通常学級において配慮が必要な児童生徒の学習支援にあたる

勤務時間は毎日7時間45分

###### ・心の教育相談員

15年度から中学校に1名ずつ配置

学校内の相談室において児童生徒や保護者の教育相談にあたる

勤務時間は毎日6時間勤務

###### ・適応指導教室(すぎなみ教室)

2名の相談員を配置

すぎなみ教室において、児童生徒や保護者の教育相談や児童生徒の学習支援にあたる

1人につき週3日(1日6時間)勤務

教室は毎日開催(月から金まで、9:00~15:00)

## エ 町校長会からの要望

昨年度、町校長会からの要望を受け、「よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート hyper-QU」を、本年度から中学校全生徒に年2回実施。

## オ 要支援児童対策員の配置

本年度10月から、週1回（原則として火曜日）、教育委員会に要支援児童対策員を配置

福祉課勤務（週1日）とあわせて、毎週2日間、子どもたちの支援、家庭や学校への支援、関係機関（医療・福祉等）との連携にあたる

## ② 次年度に向けて

ア 「子どもたちのための自立支援事業」で得た成果をどうつなげていくか

- ・定期的な担当者会の開催、情報共有、共通実践
- ・効果的な研修会の持ち方

イ 予算獲得に向けて

- ・町校長会からの要望

小学校5・6年生における「よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート hyper-QU」の実施と、活用のための研修会の開催

- ・要支援児童対策員の時数増（週3日体制）

福祉課との連携

- ・特別支援指導助手の増員配置